

5
AUG 18 1921

Medical Lib.

"GANN"

THE JAPANESE JOURNAL OF CANCER
RESEARCH

FOUNDED BY

Prof Dr. K. Yamagiwa.

Edited by Prof. Dr. Mataro Nagayo.

PUBLISHED QUARTERLY BY THE JAPANESE SOCIETY
OF CANCER RESEARCH, TOKYO.

Editorial Office: The Pathological Institute of The Tokyo Imperial University.

Volume XV. No. 2.

June, 1921.


PRINTED BY KYORINSHA & CO., TOKYO, JAPAN.

大正十年六月七日印刷
大正十年六月十日發行

癌
每三ヶ月一同發行
一册正價金壹圓
一册郵稅金四錢

東京市麴町區內幸町一丁目三番地

編輯者兼

長 與 又 郎

印刷者

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
柴 山 則 常

印刷所

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
合資 會社 杏 林 舍

賣 捌 書 肆

東京市本郷區春木町
同市日本橋區通
同市本郷區湯島切通
同市神田區通新石町
同市本郷區湯島切通
同市同區龍岡町
同市同區龍岡町

牛田屋醫藥商店
丸 善 書
南 江 堂 書
例 香 屋 書
金 原 書
南 江 堂 支店
吐 鳳 堂 書店

"GANN"

Vol. XV.

May, 1921.

No. 2.

Abstracts of the Originals.

Contents.

Experimental Studies on the Metastasis of Mouse Carcinoma.

By **S. Okonogi**, M. D. and **K. Tadenuma**, M. D.

Miscellaneous.

1. Cancer Researches in England (In Japanese).
By Prof. Dr. Y. Kon.
2. Japanese Abstracts of Foreign Works Concerning Cancer Researches.
3. Business reports of the Japanese Society of Cancer Research.

etc.

"GAIN"

Experimental Studies on the Metastasis
of Mouse Carcinoma.
(Über die experimentellen Untersuchungen der
Metastase beim Mauscarcinom.)

By

S. Okonogi, M. D. and **K. Tadenuma**, M. D.

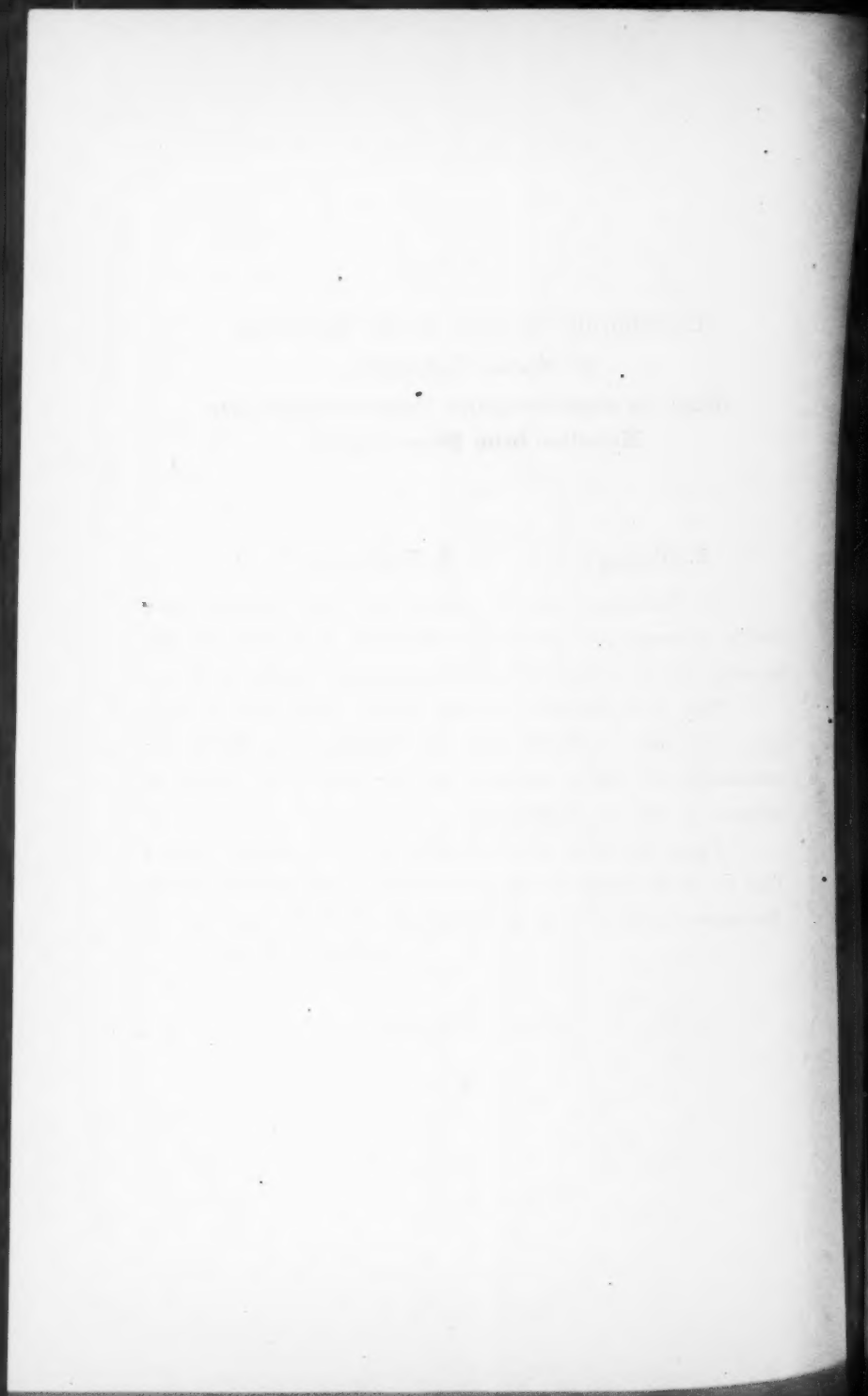
Dr. Tadenuma, one of authors, has ever observed that fowl's sarcoma has shown its increased metastasis by the bleeding, in the course of certain serological studies on it.

They have, therefore, studied on that fact since 4 years ago, and they confirmed that the bleeding is a factor for matastasis of fowl's sarcoma and reported their results in volume 12 and 14 of this paper.

Then, they tried experimentally to know whether such a fact is to be found in mause carcinoma, and obtained almost the same results of it as in the instance of fowl's sarcoma.

(Abstracted by H. Wago.)

Japanese Society of Cancer Research 7-7-28, 9



Y
2
U
N
2
1

XU

大正十年六月刊行

癌

第十五年第二册

法 社
人 團
癌
研
究
會

V
1
5
1
2
J
U
N
2
1

XU

社団法人癌研究會趣旨

近時ニ於ケル自然科學ノ進運ハ頗ル著シキモノアリ、從ツテ其基礎ヲ蹈メル醫學モ亦軌近ノ進歩甚大見ルヘキモノニ置シカラス、其研究益々精ナ加ヘ級ヲ極ムルニ至レリ。而シテ從來ノ醫學的研究ハ多ク醫學者各個カ各々自己ノ興味ト自己ノ專門トニ從ヒ互ニ相離レテ其作業ヲ試ミタルモノニシテ各方面ノ多數學者カ相會シテ提携研究ニ從事スルカ如キハ頗ル稀ナルモノナリキ、然ルニ現代ニ於ケル學界ノ進運ハ此從來ノ研究方法ト共ニ共同の研究ノ緒亦自ラ開カルルヲ見タリ。

夫ノ癌ノ如キハ古來宇内ノ隨所ニ見ラレタル甚ダ醜惡ナル疾患ノ一ニシテ、統計ニ徴スルニ之レカ爲メニ命ヲ致スモノ年々其數ヲ減セス、其人生ニ及ボス悲慘ノ度甚大ナリ、サレバ泰西ノ研究家ハ年來既ニ熱心ナル研索ヲ此方面ニ積ミテ夙ニ其疾患ノ本態ヲ究メント欲シタリ、而シテ國家並ニ社會モ亦、此方面ノ研究ニ向テ盛ナル援助獎勵ヲナセルノ例甚ダ夥ナカラサルナリ、然モ未タ尙十分ニ其真相ヲ捉フルコトヲ得サルハ蓋シ痛恨之ニ過キスト謂フヘシ。抑モ癌ナル疾患ハ現時ノ醫學分科ヲ以テ謂フ時ハ内科、外科、其他各方面ノ臨牀醫學科ニ跨リ、其研究亦解剖組織學の事項ノ外化學の並ニ各種ノ生物學の事項ニ互リテ甚廣汎ナル領域ヲ占ムルハ既ニ知ラルル所ナリ、故ニ歐米先進諸國ニ於テハ夙ニ癌ノ如キ大問題ハ到底一學者ノ孤立的の研究ノミヲ以テハ遂ニ其本態ヲ明ニスル期ナキモノナルコトヲ悟

旨

リ各方面ノ學者相倚リテ其共同研究ヲ遂ゲンコトヲ企テタリ、即チ特ニ癌研究會又ハ癌調査會ナルモノヲ設ケ完備セル研究設備ノ下ニ上記各方面ノ研索ヲ分擔セシメテ研究ノ歩武ヲ進メ來リシカ、更ニ數年前主トシテ獨逸國ノ學者ノ主唱ニヨリ萬國癌研究會ナルモノ開設セラレ爾來各國ノ研究團體互ニ國際的ニ聯絡ヲ通シテ之カ研究ヲ進メントスルニ至レリ、而シテ我邦學者ニ向テモ先年斯クノ如キ意味ヲ以テ此國際的共同研究ニ加盟センコトヲ慫慂シ來レリ、蓋シ我邦ノ如キハ歐米各國ニ比シテ風土並ニ生活、習慣、體質等ニ著シキ相違アルヲ以テ其方面ノ研究ヲ積マハ或ハ比較研究上望外ノ結果ヲ齎シ得テ學界至大ノ貢獻ヲ遂ケ得ルコト必セリ、即チ本邦ニ於ケル癌研究ハ自ラ別個ノ價值ヲ有スルモノナリ、然モ我邦ニ於テモ年々本病ノ爲ニ鬼籍ニ登ルモノ數萬ヲ下ラズ國家的ニモ亦其研究ハ忽諸ニ附スルコト能ハサルナリ、サレハ本邦ニ於テモ上記世界ニ於ケル現代醫學ノ趨勢ニ乘シ、又一面人類ノ幸福ヲ進メンガ爲ニ特ニ國際的性質ヲ有スル癌研究會ヲ設立シ、特殊ノ設備ヲ有セル研究所ヲ附屬セシメ以テ癌研究ノ中央機關タラシメ、又同時ニ治療所ヲ設立シ最新ノ研究結果ヲ應用スルハ刻下ノ緊要ナル事業ナルコト自ラ明ナリ、之レ本會ノ設立ヲ企テタル理由ニシテ蓋シ國際の時運ノ風潮ニ鑑ミ科學近時ノ發達ヲ移シテ切ニ人類幸福ノ上ニ利セントスル吾等徵衷ノ存スル所ニ外ナラス。

癌 第十五年 第二冊 目次

原 著

鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

醫學士 小此木修三
醫學士 蓼沼憲三

雜 纂

英國ニ於ケル癌研究ノ近況

醫學博士 今 裕二六

抄 録

- 一、植物ノ腫瘍様物形成ニ就テ.....ゼンセン
- 二、惡性貧血ト胃癌トノ關係ニ就テ.....ブランデス
- 三、腫瘍類症鑑別法トシテノX線放射.....ウヘインツ
- 四、胃癌ノ際ニ於ケル「スピロヘータ」ノ知見.....ラダ
- 五、喉頭痛及咽喉癌ノ光線療法.....アメルスバツハ
- 六、表在性惡性腫瘍ノ光線療法.....ナールシニミツト
- 七、癌細胞ニ對スルX線致死量.....ブルイム
- 八、腫瘍ノ實驗的研究.....ソモギ
- 九、癌ニ於ケル自家融解物ノ作用ニ關スル化學的及治療的研究.....ボッシュ

十、燕麥飼養からつてノ舌ニ及ボス作用ニ關スル研究(潰瘍形成、癌發生).....セツヘル

十一、大ナル有機化學的工場内ノ労働者ニ認メラル、惡性膀胱癌ニ就テ.....ナツソーエル

十二、長時間ノ吸入作用ニ關スル實驗的研究.....ヤッヘ

十三、肺動脈ノ癌腫性血栓性動脈内膜炎ノ一例ニ就テ.....ツニーレン

十四、甲状腺及ヒ脾臓ノ巨癌細胞性肉腫.....リッセル

十五、左側肋膜ニ滑平筋腫、右側肋膜ニ皮肉細胞腫ノ發生ヲ見タル例.....コルニツチニル

十六、廣汎ナル水腫ニ見ラレタル腦下垂體神經部ノコリサト一む.....ステルンベルグ

雜 報

- 評議員會記事●名譽會員推薦●第二回理事會記事●癌研究費追加補助●第三回理事會記事●癌研究會第十四回定期總會並ニ第十三回學術集談會記事●第十三回學術集談會演題●大正九年度懸賞論文審査要旨●癌研究會資產變更登記申請●理事變更登記申請●篤志家ノ寄附●會員異動(入會及轉居)

歐 文 欄

●癌第十五年第二冊原著抄録

第十五條 通常會員ハ會費トシテ毎年金參圓ヲ前納スルモノトス

第十六條 會員タラント欲スルモノハ其氏名現住所ヲ記シ本會事務所ニ申込ムヘシ

第十七條 退會セント欲スルモノハ其旨本會事務所ニ届出ツヘシ

第六章 役 員

第十八條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總裁 一名

副總裁 一名

會 頭 一名

副會頭 一名

理 事 七名(内理事長一名)

監 事 二名

評議員 若干名

第十九條 總裁、副總裁ハ評議員會ノ決議ニ由リ之ヲ推戴ス

會頭、副會頭ハ會員中ヨリ總會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事長、理事、監事、評議員ハ會頭ノ推薦ニ由リ總裁

之ヲ囑託ス、但監事ハ他ノ役員ヲ兼スルコトヲ得ス

第二十條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事、評議員ノ任期ハ二箇年トス、但滿期再選又ハ再囑スルコトヲ得

第二十一條 會頭、副會頭、理事長、理事、監事及評議員ニ缺

員ヲ生シタルトキハ補缺選舉又ハ囑託ヲナスコトヲ得、補缺

員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第二十二條 會頭ハ本會ヲ總理シ且總會、評議員會ノ議長トナル

副會頭ハ會頭ヲ輔佐シ會頭事故アルトキハ之ヲ代理ス

第二十三條 評議員ハ本會概要ノ事項ヲ評議ス

第二十四條 理事長ハ本會一切ノ會務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ理事代テ其職務ヲ行フ

第七章 會 議

第二十五條 總會、評議員會ハ東京ニ於テ之ヲ開ク、但時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十六條 定期總會ハ毎年四月之ヲ開ク、但開會期ハ時宜ニ

依リ變更スルコトヲ得

第二十七條 總會ノ招集ハ會報又ハ新聞若クハ通知書ニ依ツテ

之ヲ行フ

第二十八條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第二十九條 評議員ハ必要ニ應シ會頭之ヲ招集ス

第八章 雜 則

第三十條 本會ハ必要ニ應シ支會ヲ設クルコトヲ得

支會ニ關スル規程ハ評議員會決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第三十一條 本會ニ書記若干名ヲ置ク

書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ従事ス

書記ハ會頭之ヲ任免ス

第三十二條 本會ニ金品ヲ寄附シタルモノアルトキハ其氏名ヲ

社團 法人 癌 研究 會 定 款

明治四十一年四月設立
大正三年十一月法人登記
大正六年四月改正
大正十年二月改正
大正十一年四月改正

第一章 目的及事業

第一條 本會ハ癌ニ關スル研究及研究ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ懸賞論文ヲ募集シ、癌研究所、癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集談會ヲ開催スル等ノ實行ヲ期ス

但懸賞論文、癌研究所、癌治療院、學術集談會等ニ關スル規程ハ評議員會ノ決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム

第二章 名 稱

第三條 本會ハ社團法人癌研究會ト稱ス

第三章 事務所

第四條 本會ハ事務所ヲ東京市本郷區本富士町貳番地ニ置ク

第四章 資 産

第五條 本會ノ資産ハ左ノ如シ

一、癌研究會ヨリ引繼キタル資金

二、寄附金

三、會員ノ會費

四、前項以外ノ諸收入金

第六條 本會ハ前條資産ノ一部ヲ基本金トナスコトヲ得

第七條 基本金ハ評議員會ノ決議ヲ經ルニ非サレハ處分スルコトヲ得ス

第八條 本會ノ資産ハ有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若クハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ之レヲ保管ス

但場合ニ由リテ評議員會ノ決議ヲ經テ不動産ヲ買入ルルコトヲ得

第九條 本會收支ノ決算ハ翌年ノ定期總會ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第十條 本會ノ會計年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス

第五章 會 員

第十一條 本會ノ目的ヲ賛成幫助スルモノハ内外國人ヲ問ハス何人タリトモ會員タルコトヲ得

第十二條 本會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、名譽會員 一、特別會員 一、通常會員

會員ハ本會ニ於テ發行スル會報及報告書等ヲ無料ニテ受クルコトヲ得

第十三條 名譽會員ハ學術上特ニ功績アルモノ又ハ特ニ本會ノ事業ヲ贊助スルモノ及壹千圓以上ヲ寄附シタルモノニ就キ評議員會ノ決議ヲ經テ會頭之ヲ推薦ス

第十四條 特別會員ハ會費トシテ一時ニ金參拾圓以上ヲ納ムルモノ又ハ通常會員ニシテ滿十箇年間毎年會費ヲ納メタルモノトス

癌

第十五年第二冊

大正十年五月刊行

原 著

鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

Ueber die experimentellen Untersuchungen der Metastase beim
Mauscarcinom.

東京帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室

醫學士 小 此 木 修 三

東京帝國大學醫學部入澤內科教室

醫學士 蓼 沼 憲 三

緒 言

著者ノ一人蓼沼ハ嘗テ家鶏肉腫ノ血清學的研究中、再三採血セルモノニアリテハ本來轉移形成ノ稀有ナル同腫瘍ニ於テ轉移發生率ノ頗ニ増加スル事實ヲ發見シ、大正六年以來余等ハ之ガ實驗的研究ヲ

○小此木・蓼沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

第三十四條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

同	同	同	同	評議員	監事	理事	理事	理事	理事	副會長	會頭	總裁	總裁
醫學博士	總理 日本銀行 總裁	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學士	醫學士
林磐	井伊	伊森	森鹽	稻佐	高木	細長	本土	滋缺					

上澤田々木村野與肥多澤
丹澤村田田々木村野與肥多澤
雄達開廣龍喜德又慶忠榮

一員夫藏郎順衛寬興吉重作吉繁助一暉

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	評議員醫學博士
醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	男爵 醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	獸醫學博士	

字中鶴相田吉吉金大和岡 岡 遠本仁西林
濱田馬代 河本杉森 田 田 山 田 山
野 東禎又 爲清英英 和 玄 樺 雄 信
一 次 二 義 久 太 五 太 豐 一
朗 郎 郎 郎 德 藏 郎 郎 郎 治 郎 卿 吉 郎 直 光 雄

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	評議
醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士	醫學博士
樋口繁次	平井金藏	三浦政道	三田定則	木下正中	佐藤達次郎	佐藤三吉	阿妻津郎	吾妻勝三	朝倉文三	近藤繁	山極勝三郎	草間滋郎	栗本東明

東京市本郷區本富士町二番地
東京帝國大學醫學部病理學教室內
社團法人
癌研究會事務所
電話下谷九六〇番

まうすノ背部皮下ニ腫瘍えむるじよんヲ注射シ二週乃至三週間ニシテ移植陽性ノモノハ該部隆起シ明カニ腫瘍ヲ觸診シ得ルニ至ル斯クシテ得タル陽性ノモノ、ミヲ實驗ニ供セリ。

採血方法ハまうす頸靜脈ヲ剪刀ヲ以テ皮膚ノ上ヨリ切ル其程度ハ一回四五滴ニテ止血スルヲ以テ適度トス。稍々多量ニ出血シタル場合殊ニ動脈ヲ切傷シタル場合ハ動物ハ直チニ斃ル、ヲ以テ適當量ノ採血ハ頗ル困難ナリ。第一回ノ採血ヨリ一週間ニシテ第二回採血、更ニ一週日ヲ經テ第三回採血ヲ行フト雖モ血液ハ一回ハ一回ヨリ濃厚トナリ採血困難ナリ。三回採血後ハ一定ノ日數後之ヲ殺シテ剖檢シタルモノアリ、移植腫瘍ノ著シク増大發育シテ其大サ遙ニ自己ノ體ヨリモ大トナリテ歩行困難トナリ遂ニ斃死セルモノアリ。

今是等ノ方法ニヨリ得タル結果ヲ表記スレバ別表示スガ如シ。

本 試 驗

實驗番號	移植日	採血回數	殺又ハ死日	生存日數	轉移場所
一〇	五月三十一日(八)	三	八月二十二日(死)	八三	—
一一	五月三十一日	三	九月十四日(死)	一〇六	—
一二	五月三十一日	三	九月十四日(死)	一〇六	—
一三	五月三十一日	三	九月九日(死)	一〇一	—
一四	五月三十一日	三	八月五日(死)	六六	—
一五	五月三十一日	三	八月五日(死)	六六	—
一六	五月三十一日	三	—	—	頸背部皮下

○小此木・蔦沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

重子タル結果採血ノ轉移發生ニ對スル一大誘因タルヲ確メ、其成績ヲ「癌」第十二年及ビ「癌」第十四年ニ發表セリ。

此事實ノ説明如何ハ今茲ニ論ズルコトヲ避クルモ同様ノ關係ガ癌腫ニ於テモ亦見ラル、ヤ否ヤハ當然次デ來ルベキ問題ニシテ肉腫ト癌腫トノ間ニハ其轉移形成徑路ノ異ルモノアル外生物學の性狀ニ於テモ趣キヲ異ニスルモノアルヲ以テ余等ハ先ヅ鼠癌腫ニ於テ動物肉腫ニ於テ吾人ノ見タル如キ採血ノ影響アルヤ否ヤヲ檢セント欲シ實驗ヲ重子タリ、本報告ハ其成績ナリ。

余等ハ第一實驗トシテ筒井系鼠癌ニ就キ採血實驗ヲ行ヒ、第二實驗トシテ英國系鼠癌ニツキ之ヲ行ヒ、更ニ轉移ノ原因ヲ探究センガ爲メニ採血以外ノ方法ヲ以テ赤血球ノ破壊ヲ計リ轉移ノ形成セラルルヤ否ヤニ向テ第三實驗ヲ行ヒツ、アリ。

實驗第一

實驗材料

實驗材料ハ筒井系鼠癌ニシテ種ハ東京帝國大學病理學教室木村學士ニ得タリ。動物ハ純粹ノ本邦產南京鼠ヲ使用セリ。カ、ル統計の實驗ハ極メテ多クノ例數ヲ要スルヲ以テ吾人ノ此實驗ヲ始メシ初夏ノ候ヨリ初秋大氣清澄、氣溫暖ナルニ當リテハ比較的動物ノ死スルモノ少ナカリシモ其漸ク冷寒ニ向フヤ實驗ノ途中ニ動物ノ斃死スルモノ頻々相踵ギ下表ニ示ス例數ニ達スルニハ使用動物數千二百匹ヲ越エタリ唯一タコ、ニ之ヲ載スルノ繁ヲ避ケタルノミ。

實驗方法

○小此木・夢沼・鼠痛ノ轉移ニ關スル實驗的研究

九四

一七	五月三十一日	三	八月二十二日	(死)	八三	腸間膜
一八	五月三十一日	三	八月二十二日	(死)	八三	
一九	五月三十一日	三	八月五日	(死)	六六	
二〇	五月三十一日	三	九月十三日	(死)	一〇五	腎
二三	五月三十一日	三	九月十七日	(殺)	一〇九	脾
二四	五月三十一日	三	九月十七日	(殺)	一〇九	肝
二五	五月三十一日	三	九月十七日	(殺)	一〇九	肝、腎
二六	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	肝
二七	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	肝
二八	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	兩側腎
二九	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	肺
三〇	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	肝
三一(a)	六月二十八日	三	九月十八日	(殺)	八二	
三三	十月十八日	三	十一月十四日	(死)	二七	
三四	十月十八日	三	十一月十四日	(死)	二七	
三五	十月十八日	三	十一月十四日	(死)	二七	
三六	十月十八日	三	十一月十五日	(死)	二八	肝
三七	十月十八日	三	十一月十五日	(死)	二八	肝
三八	十月十八日	三	十一月十五日	(死)	二八	
三九	十月十八日	三	十一月十八日	(死)	三一	兩側肺

五七	十二月七日	二	十二月八日	三一	
五八	十二月七日	二	十二月八日	三一	肺
六七	十一月十六日	二	十二月十四日	三〇	
七三	十一月十六日	二	十二月二十三日(死)	三七	
七四	十一月十六日	二	十二月二十三日(死)	三七	腎, 肝, 胃部, 脾, 腸間膜
七五	十一月十六日	二	十二月二十三日(死)	三七	
七六	十一月十六日	二	十二月二十三日(死)	三七	
八三	十一月二十九日	二	一月六日 (死)	三八	腎
八四	十一月二十九日	二	一月六日 (死)	三八	肝
九一	十一月二十三日	二	一月二十六日 (死)	六四	肝, 肺, 腎,
九六	十一月二十三日	二	二月十日 (死)	七九	肝, 肺
九七	十一月二十九日	二	二月十二日 (死)	七五	脾
九八	十一月二十三日	二	二月十二日 (死)	八一	
九九	十一月二十三日	二	二月十二日 (死)	八一	
一〇一	一月二十二日	二	二月二十三日 (死)	三二	胃壁
一〇三	一月二十六日	二	二月二十七日 (死)	三三	肝
一〇四	一月二十六日	二	二月二十七日 (死)	三三	肝
轉移數 一二例 (二五例中) 四九%					
實驗番號	移植日	採血回數	殺又ハ死日	生存日數	轉移場所
四四	十一月七日	一	十一月二十二日(死)	一五	

○小此木・墓沼・鼠竊ノ轉移ニ關スル實驗的研究

○小此木・藝沼・鼠痛ノ轉移ニ關スル實驗の研究

九六

八七	十一月十六日	三	一月十七日	(死)	六二	
八八	十一月十六日	三	一月十七日	(死)	六二	
八九	十一月十六日	三	一月十七日	(死)	六二	
九〇	十一月十六日	三	一月二十六日	(死)	七一	腎、肺
九三	十一月十六日	三	一月二十七日	(死)	七二	
九四	十一月十六日	三	一月二十七日	(死)	七二	兩腎
一〇二	一月二十六日	三	二月二十六日	(死)	三二	肝
一〇七	三月三日	三	五月十三日	(死)	七一	肺
一〇八	三月三日	三	五月十四日	(死)	七二	肝
一〇九	三月三日	三	五月十六日	(死)	七四	
轉移 二九例 (五十七例中) 五〇%						
實驗番號						
八	五月三十一日	二	八月五日	(死)	六六	轉移場所
九	五月三十一日	二	八月五日	(死)	六六	
三一	十月十八日	二	十一月十四日	(死)	二七	
三二	十月十八日	二	十一月十四日	(死)	二七	
五一	十一月七日	二	十二月四日	(死)	二七	
五二	十一月七日	二	十二月四日	(死)	二七	肝
五四	十一月七日	二	十二月六日	(殺)	二九	
五六	十二月六日	二	十二月六日	(殺)	二九	肝

實驗番號

移植日

採血回數

殺又ハ死日

生存日數

轉移場所

内譯

肝臟轉移	三四例	三四%	轉移總數ノ	六四%
腎臟轉移	一〇例	一〇%	”	一九%
肺臟轉移	一〇例	一〇%	”	一九%
脾臟”	三例	三%	”	五・八%
淋巴腺(肺門部、腸間膜)	三例	三%	”	五・八%
胃壁	二例	二%	”	四%
皮下	一例	一%	”	二%

今少シク上記ノ表ヲ按ズルニ採血實驗ニヨル轉移ハ總數一〇〇例中五三例即五三%ヲ占ム。而シテ筒井博士ノ記載ニヨレバ本系ニ於テハ通常四〇%ノ轉移形成アリ、然レドモ鼠癌ニアリテモ轉移ノ形成ハ其移植世代ニヨリ大差アルハ明ナル事實ナリ即チ余等ハ下表ニ示ス如ク本實驗ト同時ニ對照トシテ採血セザルモノヲ剖檢セリ其成績次ノ如シ。

對照

實驗番號	移植日	殺又ハ死日	生存日數	轉移場所
一	八月一日	九月二十日 (殺)	五一	肝
二	八月十四日	九月二十日 (殺)	三七	肝
三	八月一日	九月二十日 (殺)	五一	
四	八月十四日	十月十日 (死)	二四	
五	十月十八日	十一月十一日 (殺)	二四	

○小此木・蕪沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

○小此木・蓼沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

四 五	十一月七日	—	十一月二十二日(死)	一五	肝
四 八	十一月七日	—	十一月二十二日(死)	一五	肝
四 九	十一月七日	—	十一月二十二日(死)	一五	肝
五 〇	十一月七日	—	十一月二十九日(死)	二二	肺
五 三	十一月七日	—	十二月六日(殺)	二九	肝
六 〇	十一月十六日	—	十二月八日(死)	二四	肝
六 一	十一月十六日	—	十二月八日(死)	二四	肝
六 三	十一月十六日	—	十二月十二日(死)	二八	肝
六 四	十一月十六日	—	十二月十三日(死)	二九	肝
六 五	十一月十六日	—	十二月十三日(殺)	二九	肝
七 七	十一月二十九日	—	十二月二十四日(死)	二五	肝
七 八	十一月二十九日	—	十二月二十四日(死)	二五	肝
二 九	十一月二十九日	—	十二月三十日(死)	三一	肺
九 二	十一月二十九日	—	一月二十六日(死)	五八	肺
九 五	十一月二十九日	—	一月二十七日(死)	五九	肝
一 〇〇	一月十日	—	二月十八日(死)	三九	肝
一 〇六	一月十日	—	四月十八日(死)	九九	肝、腎

轉移數 (二例) (一八例中) 六七%

二四	十一月七日	十二月十二日(死)	三五
二五(a)	十一月二十四日	十二月十三日(殺)	一九
二五(b)	十一月七日	十二月三十一日(死)	四四
二六	十一月七日	十二月三十一日(殺)	四四
二七	十一月七日	十二月三十一日(殺)	四六
二八	十一月七日	十二月二十四日(死)	四七
二九	十一月十六日	十二月三十一日(死)	四一
三〇	十一月十六日	十二月三十一日(死)	四一
三一	十一月十六日	十二月三十一日(殺)	四一
三二	十一月七日	十二月三十一日(殺)	五三
三三	十一月七日	十二月三十一日(殺)	二九
三四	十一月十六日	十二月三十一日(殺)	二〇
三五	十一月二十九日	一月六日(殺)	四七
三六	十一月二十九日	一月六日(殺)	四七
三七	十一月七日	一月十日(殺)	六四
三八	十一月七日	一月十日(殺)	六四
三九	十一月七日	一月十日(殺)	六四
四〇	十一月七日	一月十日	六四
四一	十一月七日	一月十日	六四
四二	十一月二十九日	一月三十一日	五三

○小此木・藝沼・鼠糖ノ轉移ニ關スル實驗的研究

○小此木・藝沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

六	十月十八日	十一月十二日(殺)	二四	肺
七	十月十八日	十一月十一日(殺)	二四	
八	十月十八日	十一月十一日(殺)	二四	
九	十月十八日	十一月十一日(殺)	二四	
一〇(a)	十月十八日	十一月十三日(死)	二六	肝
一〇(b)	十月十八日	十一月二十日(死)	三三	
一一(a)	十月十八日	十一月十三日(死)	二六	肝
一一(b)	十月十八日	十一月二十一日(死)	四八	
一二	十月十八日	十一月二十二日(死)	三五	肝
一三	十月十八日	十一月二十六日(死)	三九	
一四	十月十八日	十一月二十九日(殺)	四二	
一五	十月二十九日	十一月二十九日(殺)	三一	
一六	十月二十九日	十一月二十九日(殺)	三一	
一七	十月二十九日	十一月二十九日(殺)	三一	
一八	十月二十九日	十一月二十九日(殺)	三一	
一九	十月二十九日	十一月二十九日(殺)	三一	
二〇	十一月七日	十二月九日(死)	三二	肝
二一	十一月七日	十二月九日(死)	三二	肝
二二	十一月七日	十二月十日(死)	三三	肝
二三	十一月七日	十二月十一日(死)	三四	

六二	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
六三	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
六四	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
六五	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
六六	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
六七	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
六八	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
六九	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
七〇	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
七一	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
七二	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
七三	二月十九日	三月二十九日	(死)	四〇
七四	二月十七日	三月二十九日	(死)	七三
七五	二月十七日	三月二十九日	(死)	七三
七六	二月十日	三月二十九日	(死)	八〇
七七	二月十日	三月二十九日	(死)	八〇
七八	二月十日	三月二十九日	(死)	八〇
七九	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八〇	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八一	二月十日	三月三十一日	(死)	五一

○小此木・藝沼・鼠橋ノ轉移ニ關スル實驗的研究

○小此木・臺沼・鼠癌ノ轉移ニ關スル實驗的研究

四三	十一月二十九日	一月二十六日	(死)	五八
四四	十二月二十三日	一月二十六日	(殺)	三四
四五	十一月二十九日	二月二日	(死)	五九
四六	十二月二十九日	二月二日	(死)	三五
四七	十二月二十九日	二月二日	(死)	三五
四八	十二月二十九日	二月二日	(死)	三五
四九	十二月二十九日	二月二日	(死)	三五
五〇(a)	十二月二十九日	二月二日	(死)	三五
五〇(b)	一月十日	二月十二日	(死)	三三
五一	一月十日	二月十二日	(死)	三三
五二	一月十日	三月十二日	(死)	三三
五三	一月二十六日	三月十九日	(死)	五四
五四	一月二十六日	三月十九日	(死)	五四
五五	二月二日	三月二十九日	(死)	五七
五六	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
五七	二月十日	三月二十九日	(死)	四九
五八	二月二日	三月二十九日	(死)	五四
五九	二月二日	三月二十九日	(死)	五七
六〇	二月二日	三月二十九日	(死)	五七
六一	二月十日	三月二十九日	(死)	四九

轉移數

肝臟轉移

二二 二一・三%
一九 一八・六%

轉移總數ノ

八六・三%

肺臟

二 一・九%

”

九%

胃

一 〇・九%

”

四・五%

是ニ依レバ、對照ニ於テハ、一〇三例中、轉移數僅カニ二例、二一・三%ニ過ギズ、之ヲ先記本試驗ニ於ケル五三・〇%ニ比スル時ハ、著シク小ニシテ、採血ガ轉移形成ニ對スル一大誘因トシテ、意義アルコトハ吾人ガ曩ニ家鶏肉腫ニ於テ得タルト同ジク、鼠癌ニ於テモ之ヲ確定シ得タリト云フ可シ。

各臟器ニ對スル轉移率

余等ノ實驗ニ於テ最モ屢々轉移ノ發生セル臟器ハ肝臟ニシテ、轉移總數五三例中三四例ニシテ實ニ六四%ヲ占ム。肺臟、腎臟ノ各一九%之ニ次ギ、淋巴腺ハ僅ニ五・八%ナリ之ヲ對照ニ見ルニ肝臟ノ八六・三%最高位ニシテ、肺臟ノ九%之ニ次グラ以テ實驗成績ト一致ス。

筒井博士ノ記載ニヨレバ、轉移ハ腹膜ニ最モ多シトナセドモ、尾背部ニ移植セルモノガ發育スル方向ハ主トシテ腹膜ニシテ是等ハ轉移ニアラズシテ少クトモ其一部ハ連續的浸潤ナラン。余等ハカ、ルモノハ轉移中ニ算入セザリシナリ。

次ニ轉移腫瘍竝ニ其周圍トノ關係ヲ明示センガ爲ニ組織的造構ノ一般ヲ略記スベシ。

吾人ガ實驗成績ニ明記セル轉移ハ肉眼のニ著明ナル者ノミナリ。河合氏ハまうす癌ニ於テ精細ナル顯微鏡的検査ニヨリテ腎臟ニテ多數ノ轉移ヲ證明シ得タリ、余等ノ實驗ニ於テモ腎轉移ハ一〇〇例中

○小此木・夢沼・鼠痛ノ轉移ニ關スル實驗的研究

八二	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八三	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八四	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八五	二月十日	三月三十一日	(死)	五一
八六	二月十日	四月十八日	(死)	六九
八七	二月十日	四月二十一日	(死)	七二
八八	二月十日	四月二十五日	(死)	一〇六
八九	二月十九日	四月二十六日	(死)	六九
九〇	二月十九日	四月三十日	(死)	七二
九一	三月三日	四月三十日	(死)	五八
九二	二月十日	五月三日	(死)	一一四
九三	三月三日	五月七日	(死)	六五
九四	三月三日	五月七日	(死)	六五
九五	三月三日	五月十日	(死)	六八
九六	二月十日	五月十一日	(死)	九二
九七	二月十日	五月十四日	(死)	九五
九八	二月十日	五月十四日	(死)	九五
九九	二月十日	五月十四日	(死)	九五

一〇四

肺

對照總數

一〇二

生セルヲ見ルベシ此部及ビ肝細胞部ニハ膽色素ノ浸潤ヲ見ルモ中心ノ變性部ニハナシ。

以上ノ轉移結節ハ小葉内ニ形成セラレタルモノナルガ稀ニ轉移ハグリソン氏被膜ニ占居スルモノアリ。

肝細胞ハ一般ニ著變ナキモ轉移ノ周圍ニハ細胞離開ヲ呈セルモノ多ク脂肪變性ニ陷レルモノアリ膽色素ノ浸潤亦尠カラズ。

肺臟轉移所見

肺臟ノ轉移ハ肉眼的ニモ顯微鏡的所見ニ於テモ梗塞狀ヲ呈スルモノ多ク概テ孤在性ナリ、多クハおるがみみくりヲナシ肝臟轉移ノ如ク乾酪變性ヲ呈セザルモノ多シ。周圍ノ組織ニ向テ瀰蔓性ヲナスヲ固有トス。其乾酪變性ヲナサバルモノニアリテハ肺胞中隔ノ比較的健存スルガ故ニ恰モ蜂巢狀ヲナシ腫瘍性肺炎ノ觀アリ、轉移周圍ノ肺胞ニモ圓形細胞、赤血球及ビ滲出液ニ充テ肺炎ノ狀ヲ呈ス。

腎臟轉移所見

腎臟轉移ニアリテハ孤在性ノモノ多ク多發性ノモノハ少シ、孤在性ノモノニテモ屢々遭遇セルモノハ腎ノ上極ニ來ルモノナリ。孤在性ノモノニアレ多發性ノモノニアレ轉移ハ境界銳利ニシテ肺臟轉移ノ如ク浸潤セズ。其轉移ノ小ナルモノヲ見ルニ血管周圍ニ細胞套形成像ヲ示セリ。其轉移ノ發育稍々進行セルモノニアリテハ中心既ニ壞死ニ陥リ核ノ崩壞セルモノ尠カラズ。

脾臟轉移所見

脾臟ノ轉移ハ稀有ナルモノニシテ僅ニ三例ニ過ギズ。悉ク孤在性ニシテ周圍組織ヨリ分界線ヲ以テ

一〇例即一〇%ヲ占ム然ルニ對照ニ於テハ一例モ見出サバルナリ。河合氏ノ轉移率ハ極メテ多キモコレ顯微鏡的ニ小ナルモノヲ入レタルニヨル、余等ハ肉眼の轉移ノミヲ探レリ蓋シ腫瘍ノ經過中腫瘍細胞ハ全身ニ循環シツ、アルハ先達諸學者ノ認ムル所ニシテカ、ル腫瘍えんぼリーガ從來發育スルヤ否ヤハ別個ノ問題ナルヲ以テ是等ヲ總テ轉移トシテ論ズルハ疑問ナレバナリ。

一、肝臟轉移所見

肉眼のニ既ニ灰白色圓形ノ結節狀斑點トシテ認メラレ表面甚シク隆起セズ。孤在性ノモノアリト雖モ多クハ多發性ナリ。中ニハコレヲノ轉移結節互ニ相癒合シテ不規則ノ灰白色結節ヲ形成シ表面凹凸常ナク所謂分葉肝狀ヲ呈セルモノ數例アリ。

顯微鏡的所見

多クノ場合ニ於テハ肉眼のニ見タルヨリモ多數ニ轉移結節ヲ發見シ其多クハ不整圓形ニシテ暗夜ノ明星ヲ見ル如ク健組織内ニ散點ス。其癒合セルモノニアリテハ轉移結節ノ形狀不規則ヲ極ム。

轉移結節ノ大多數ハ其中心ニ血管ヲ藏シ其周圍ハ概テ壞死ニ陥リ核ハ既ニ其影像ヲ沒シワン、ギーソン氏染色法ニテ紅染セル部アリ。其外層ニハ腫瘍細胞ノ浸潤アリテ往々周圍ノ健康組織ニ向ツテ多少瀾漫性浸潤ヲナシ其境界ノ明瞭ヲ缺クモノナキニ非ズト雖モ多クハ肝細胞ノ腫瘍細胞ニ接スル部ハ壓迫セラレ紡錘形トナリ恰モ内被細胞ニ被ハル、ガ如キ觀ヲ呈ス。中ニハ中心ノ大部分乾酪變性ニ陥リ變形セル核塊ノ存スル部ト全ク核ノ存セズシテえおじんニテ紅色トナレル部ト參差錯綜シ僅カニ周圍ニ被膜狀ヲナシテ腫瘍細胞ノ浸潤セルモノアリ。コノ増殖發育シツ、アル腫瘍細胞層ニハ小血管簇

接種ノ方法、採血ノ方法等ハ實驗第一ノ場合ト全然同一ナリ。

本試驗

實驗番號	移植日	採血回數	殺又ハ死日	生存日數	轉移場所
一	四月十九日	二	五月三日 (死)	一四	肝
二	四月十九日	二	五月三日 (死)	一四	肝
三	四月十九日	二	五月五日 (殺)	一六	肺
四	四月十九日	二	五月五日 (殺)	一六	肺、肝
五	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝
六	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝、兩肺
七	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝、兩肺
八	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝、兩肺
九	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝、兩肺
一〇	四月十九日	二	五月六日 (殺)	一七	肝、兩肺
一一	四月十九日	二	五月十日 (死)	二一	肝
一二	四月十九日	二	五月十一日 (死)	二二	肝
一三	四月十九日	二	五月十二日 (死)	二三	肝
一四	四月十九日	二	五月十四日 (死)	二五	肝
一五	四月十九日	二	五月十五日 (死)	二六	肝
一六	六月十四日	二	七月七日 (死)	二四	肝

○小此木・藝沼・鼠猫ノ轉移ニ關スル實驗的研究

隔テラル、何レノ標本ニテモ未ダ壞死ニ陥リシモノヲ認メズ。

實驗第二

第一實驗ニアリテ筒井系癌腫ノ移植ナルヲ以テ純粹ノ本邦產二十日鼠ヲ使用シ、試驗期間ハ大正八年五月ヨリ大正九年三月ニ及ベリ。偶々大正八年九月外國種ノまうす癌ガ東京帝國大學病理學教室癌研究會ニヨリテ本邦ニ輸入セラレタルヲ以テ木村學士ノ厚意ニヨリ之ガ分與ヲ受ケ大正九年四月ヨリ第二實驗ニ著手セリ。今實驗成績ヲ掲グルニ先チ此材料ニツキ少シク紹介スル所アルベシ。

本腫瘍ハロンドン王立癌研究會癌腫六十三號 M(63/171. M.)ニシテ木村學士ノ接種成績表ニヨレバ

一、本腫瘍ハ其發育迅速ニシテ肉眼的ニハ限界稍々判明ナル囊腫様ノ狀態ヲ呈スルコト多ク質柔軟ニシテ眞性或ハ假性波動ヲ呈ス。剖面褐色乃至赤褐色軟泥狀ノ軟化又ハ出血ヲ呈スルコト多ク間質結締組織ノ發育不良ニシテ小葉狀ノ造構明ナラズ。組織學的ニ血管ニ富ミ且ツ血管周圍ニ於テ著明ナル細胞套形成像ヲ呈シ尙ホ著明ナル壞死、軟化或ハ出血ノ狀ヲ認ム。

二、本腫瘍ノ移植陽性率ハ稍々大ニシテ七四・五%ニ達ス。

余等ノ實驗ニヨレバ所謂英國鼠或ハ佛國鼠ト稱スルモノ、健康ナルモノニ接種スレバ殆ンド一〇〇%ノ移植陽性率ヲ得ルガ如シ。

尙ホ本腫瘍ノ轉移率ニ就テハ木村學士ハ別ニ報告セズ且ツ原著ニ接セザルヲ以テ不明ナリシモ余等ノ對照ニ見ルガ如ク極メテ微々タルモノナリトノコトナリ。

轉移例總數

一八例

轉移率

五二・九%

內 肝臟轉移

一六例

總數ノ

四七%

肺臟轉移

四例

總數ノ

一二・〇%

對照

轉移ノ
轉移ノ

八八・八%
二二・%

實驗番號

移植日

殺又ハ死日

生存日數

轉移場所

一 四月十九日
二 四月十九日
三 四月十九日
四 四月十九日
五 四月十九日
六 四月十九日
七 四月十九日
八 四月十九日
九 四月三十日
一〇 四月三十日
一一 四月三十日
一二 四月三十日
一三 四月三十日
一四 五月八日

五月七日 (殺)
五月十一日 (死)
五月十一日 (死)
五月十一日 (死)
五月十四日 (死)
五月十五日 (死)
五月十五日 (死)
五月十五日 (死)
五月十九日 (死)
五月二十二日 (死)
五月二十四日 (死)
五月二十四日 (死)
五月二十五日 (死)
五月二十五日 (死)
六月一日 (死)

一八
二二
二二
二二
二二
二六
二六
三〇
二二
二四
二四
二五
二五
二三

肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝 肝

○小此木・善沼・貝籍ノ轉移ニ關スル實驗的研究

一一一

○小此木・善沼・風橋ノ轉移ニ關スル實驗的研究

一七	六月十四日	二	七月九日	(殺)	二五
一八	六月十四日	二	七月九日	(殺)	二五
一九	六月十四日	二	七月九日	(殺)	二五
二〇	六月十四日	二	七月九日	(殺)	二五
二一	六月十四日	二	七月九日	(殺)	二五
二二	六月十四日	三	七月十四日	(死)	三〇
二三	六月十四日	三	七月十四日	(死)	三〇
二四	六月十四日	三	七月十五日	(死)	三一
二五	六月十四日	三	七月十五日	(死)	三一
二六	六月十四日	三	七月二十二日	(死)	三八
二七	六月十四日	三	七月二十二日	(死)	三八
二八	六月十四日	三	七月二十二日	(死)	三八
二九	六月十四日	三	七月二十五日	(死)	四一
三〇	六月十四日	三	七月二十五日	(死)	四一
三一	六月十四日	三	七月二十六日	(死)	四二
三二	六月十四日	三	七月二十八日	(死)	四四
三三	六月十四日	三	七月二十八日	(死)	四四
三四	六月十四日	三	七月三十日		四六

肝 | 肝 | 肝 肝 肝 肝 肝 | 肺 肝 | | 肝 | |

轉移總數

三例

轉移率

九%

上記ノ表ヲ見ルニ第一實驗即チ筒井系ニ比シ對症ノ轉移數僅ニ九・〇%ニシテ極メテ少シ、之レ腫瘍ノ發育迅速ニシテ動物壽命ノ前者ニ比シテ甚ダシク短カク随ツテ轉移ヲ形成スルニ遑ナキニヨル。然ルニ採血實驗ニヨルモノハ壽命ノ長カラザルニ拘ハラズ實ニ五二・九%ノ轉移形成ヲ見タリ而シテ其最モ多キハ肝臟ニシテ肺臟之ニ次グ。

今是等ノ轉移ノ病理解剖的所見ヲ左ニ掲ゲン。

肝臟轉移

肉眼的所見 表面隆起セザル灰白色圓形ノ小結節ニシテ周圍組織ト境界極メテ判然タリ、大サハ粟

粒大乃至麻實大ナリ。

顯微鏡的所見 肉眼的所見ノ如ク境界著明ナルモ囊腫様ノ發育ヲトル、囊壁ニ當ル部ハ結締織ニ富

ミ周圍組織ニ向テ蜘蛛網ノ如ク擴延ス、内容ハ或ハ壞死軟化シ僅カニ核崩壞ノ痕跡ヲ止ムルモノ或ハ

殆ンド等質ノモノト化セルモノアリ。

肺臟轉移所見

肉眼的所見 多發性ニシテ形狀百態、稍々灰色ヲ呈シ表面隆起セズ。

顯微鏡的所見ニ於テハ大ナル轉移ニアリテハ腫瘍性肺炎ノ像ヲ見ルモ一部囊壁ヲ形成スルモノアリ。

小胞巢ヲ作り中隔ヲ存シおるがんみくりヲ呈スル部少ナカラズ。

○小此木・慈沼・鼠橋ノ轉移ニ關スル實驗的研究

○小此木・墓沼・鼠病ノ轉移ニ關スル實驗的研究

一五	五月八日	六月一日	(死)	二三
一六	五月八日	六月一日	(死)	二三
一七	五月八日	六月二十日	(死)	四二
一八	六月十四日	七月十五日	(死)	二九
一九	六月十四日	七月十五日	(死)	二九
二〇	六月十四日	七月二十七日		四三
二一	六月十四日	七月三十日		四六
二二	六月十四日	七月三十日		四六
二三	六月十四日	八月二日	(死)	四八
二四	六月十四日	八月二日	(死)	四八
二五	九月三日	九月二十三日	(死)	二〇
二六	九月三日	九月二十六日	(死)	二三
二七	九月三日	十月一日	(死)	二八
二八	九月三日	十月八日	(死)	三五
二九	九月三日	十月十一日	(死)	三八
三〇	九月三日	十月十二日	(死)	三九
三一	九月三日	十月十二日	(殺)	三九
三二	九月三日	十月十二日	(殺)	三九
三三	九月三日	十月十二日	(殺)	三九

肝

一一二

對照實驗總三三例中

圖 一 第

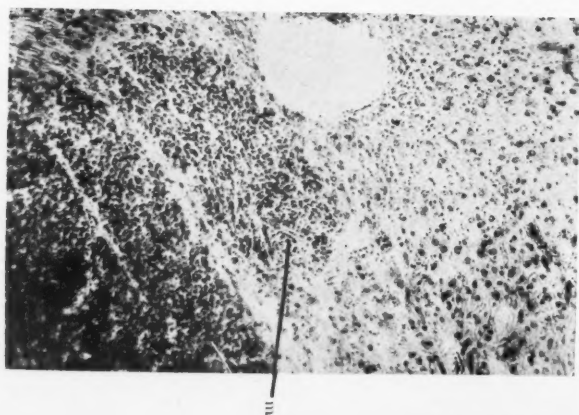


圖 二 第

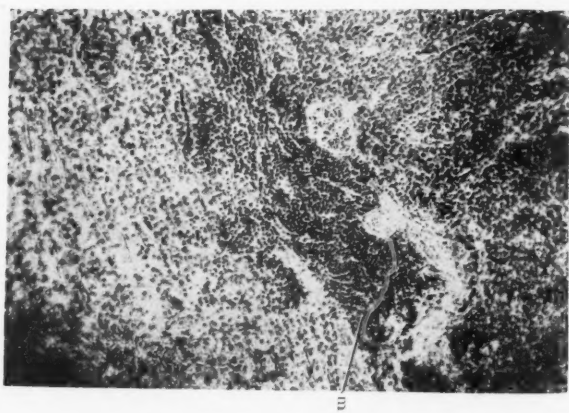
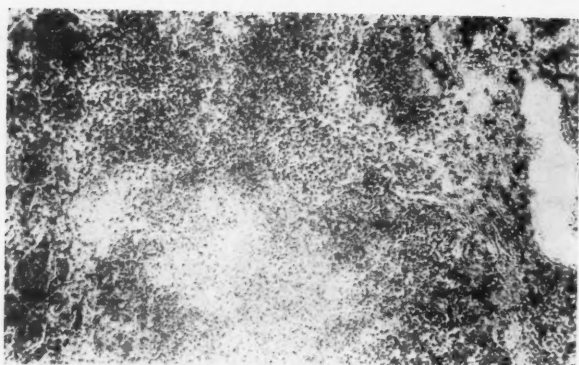


圖 三 第



小ナル轉移ニアリテハ粟粒結核ヲ見ルガ如ク諸所ニ小結節狀ヲナシテ占居シ、而シテ中心ハ既ニ壞死ニ陷ルモノ多シ。

綜 括

以上實驗第一即チ筒井系鼠癌ニ於テモ實驗第二即チ英國系鼠癌ニ於テモ、採血ノ結果ハ對照ニ比シテ著ルシク多數ノ轉移形成ヲ見ルコト表記ノ如シ、殊ニ英國系鼠癌ニアリテハ腫瘍ノ發育成長旺盛ニシテ移植後僅カニ數日ノ生命ヲ保ツニ過ギズ隨テ自然轉移ハ稀有ニ屬スルニ、採血セルモノハ轉移形成五二・九%ニ達セルハ頗ル興味アルコトナリ。余等ハ曩ニ家鶏肉腫ノ移植セルモノ、採血ニヨリ轉移形成ヲナスコトヲ實驗シ當時思フク、採血ノ結果轉移ノ形成ヲ見ルハ肉腫ニ限ラズ癌腫ニ於テモ或ハ然ラント。而シテ實驗ノ結果ハ全ク余等ノ推定ヲ確實ニ證明シ得タリ。由是觀之バ惡性腫瘍ヲ移植セル動物ヨリ採血スル時ハ屢々轉移ヲ形成スト云フヲ得ベシ。

臨牀家ハ夙ニ手術及ビ出血患者ニ轉移ノ多キヲ認メタル所ナレドモ其理ヲ明ニセズ而シテ余等ノ實驗的證明ハ或ハ此方面ノ消息ニ關スル所アルベシ。

而シテ其轉移形成ノ容易ナル眞因ハ何レニアリヤヲ討究スルコトハ必要ナルモ此問題ニハ恐ラク種種ノ點ヲ考慮セザル可ラズ其著明ナル一現象即チ貧血自己ハ如何ナル意義ヲ有スルヤヲ知ルコトハ先決問題ナリ。此問題ヲ解決センガ爲ニ余等ハ腫瘍移植動物ニふえにーるひどらんヲ注射シ溶血作用ヲ圖リ貧血ヲ起サシメ果シテ轉移ノ形成スルヤ否ヤ第三實驗トシテ之ヲ試ミツ、アルヲ以テ他日其所見ヲ報告スル所アラントス。

本研究ニハ長興教授及諸方助教授ノ指導ヲ受クルコト大ナリ、謹ミテ感謝ノ意ヲ表ス

附圖說明

第一圖、肝轉移(筒井系)

m、轉移

第二圖、腎轉移(筒井系)

第三圖、肺轉移(筒井系)

第四圖、脾轉移(筒井系)

第五圖、肝轉移(英國系)

c、莢膜狀部

i、腫瘍細胞浸潤

第六圖、肺轉移(英國系)

○小此木・善沼・貝嶋轉ノ轉移ニ關スル實驗的研究

圖 六 第



圖 五 第

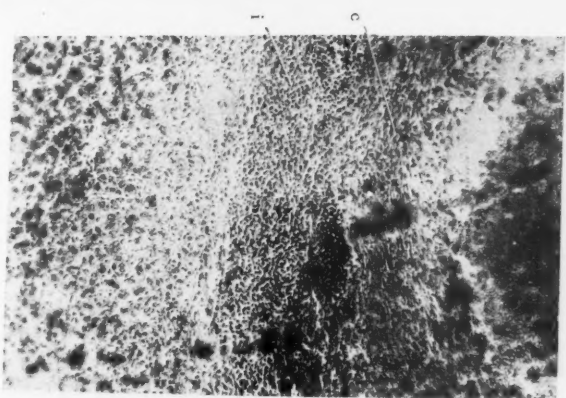
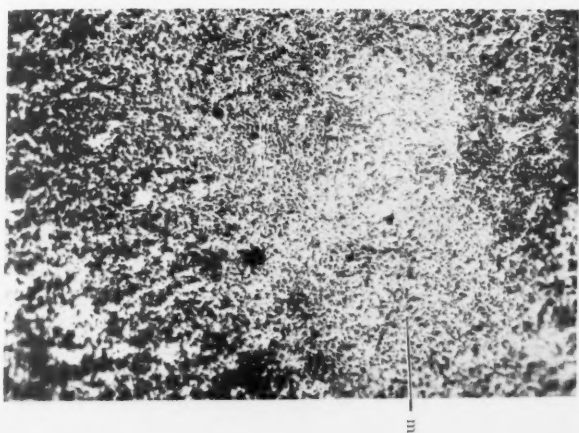


圖 四 第



究所ハ既ニ精シク御存ジノ如ク全ク實驗的研究ヲ主トスルモノニ有之患者ヲ收容スベキ病院ヲ附屬セズ當今專ラ Murray 氏ノ天下ニテ同氏ハ同研究所ニ於テ最モ主要ノ役目ヲ務メ居候、目下同研究所ノ業績トシテハ特ニ舉グ可キモノ無ク可移植性腫瘍ノ種ツギハ不相變繼續致シ候得共研究業績トシテハ山極博士ノてゝる塗布試驗、腫瘍組織ノ人工培養、動物飼料殊ニびたみんと腫瘍増殖ノ關係等ニテ格別新ラシキモノ無之候、山極博士ノ研究ハ各大學、研究所ニ於テ最モ注目セラレ苟モ病理學ニ從事シ居ルモノハ何レモ第一ニ之ヲ話題ニ上スト云フ様ナ有様ニテ紐育ノ Crocker 研究所ニテモ茲ニテモ Nachprüfung ヲ致シ居ル次第ニ候、但シ何處モ同ジク物價騰貴ニテ家兎ヲ用ユルハ大變ト見エ何レニテモ甘口鼠ヲ使用致シ居候、Crocker 研究所ニテハ數ケ月ニ互リテ試ミタレド單ニ皮角及上皮ノ増殖ヲナスノミニテ癌性増殖ヲ起サシメ得タルモノハ無ク氣早ノ Wood 氏ノ如キハ早クモ山極博士ノ業績ニ疑問ヲ抱キ居リシ様ナリシガ倫敦ニ來リテ Murray 氏ノ研究ヲ見レバ立派ニ甘口鼠ニテ成功シアリ而モ一度發生セルモノヲ根本的ニ手術的ニ剔出シ之レヨリ再發セルモノナドモアル様ナ次第ニ紐育ニ於ケル成績トハ雲泥ノ相異ニ有之候、如斯成績ニ差別アルハ何ニ原因スルヤ或ハ使用てゝるノ種類品質ニ關係スルニアラズヤト考ヘラレ候、此點ニ付テハ山極、市川兩博士等ノ御經驗アルコト、存ジ候、市川博士ヨリ豫テ同氏ノ用キタルてゝるガ人ノ皮膚ニツケルトキニハ局部ニ充血ヲ起ス様ナ話ヲ聞タコトアル様ニ覺エ候マ、爲念 Crocker 研究所ニテてゝる塗布係ヲ務メ居ル人ニ相尋子候處皮膚ニ附著スルモノ等ノ刺激ヲ起サル由ノ答ニ有之候、てゝるノ化學ヤ製品ノコトハ良ク存ジ不申候得共癌發生ノ成否ハドウモてゝるノ種類ニ關係スルモノ大ナルニ非ラズヤト愚考致シ候、飼料殊ニびたみん

雜 纂

英國ニ於ケル癌研究ノ近況

在倫敦、醫學博士 今

裕

(今博士ヨリ長與博士ニ宛テラレタル通信ノ一部)

第五信 (一九二一年三月十五日發信)

流石舊國ダケニ倫敦ノ深サハ容易ニ計リ知ル可ラザルモノ有之初メ亞米利加ヨリ著イタ當座ハ倫敦與シ易キノミノ感ヲ持シ候處段々永ク居レバ居ル程幅ニ於テモ深サニ於テモ容易ナラザルモノヲ見ルニ至リ申候、昨今一通専門ニ關係アル方面ノ見學ヲ終ヘ候ニ付一兩日中蘇格蘭ニ赴キエヂンバラ、グラスゴーノ見學ニ出懸クル積ニ有之春陽四月末大陸ニ渡リ可申伯林ニ本陣ヲ据ヘテ行動可致歸朝ノ船ハ十月十五日倫敦發ノ日本郵船(分捕船)「クライスト」號ニマルセイユヨリ乗込ムコトニ取極メ候ニ付十二月七八日頃神戸著ノ豫定ニ有之候、左ニ癌研究所、病院ニ關スル見聞ノ一端御報可申候。

倫敦ニ於ケル癌研究所ハ Imperial Cancer Research Fund ノ研究所ノ外癌病院トシテ最モ古キ歴史ヲ有スル The Cancer Hospital 々今一ツ Middlesex Hospital ニ附屬スル Cancer Research Laboratory ノ三ツニ有之何レモ詳細見學當事者ト會談スルノ機會ヲ得申候、Imperial Cancer Research Fund ノ研

シ専ラ病理的診斷ヲ司リ居リ候得共病院ノ建物トハ少シ離レテ別ニ癌研究所アリ之レハ十年前ノ建物ニ係ハルモノ、由ニテ茲ニモ亦病理部、化學部、生理學部アリ又完備セル圖書室アリ、前記 Leisch 氏ハ病院ニ於ケル Pathological Laboratory ノ部長兼癌研究所長ニ有之同氏ハ Glasgow 出ノ純然タル病理解剖學者ニテ専ラ人體腫瘍ノ病理解剖ニ從事セラレ實驗的研究ハ目下ノ處致シ居ラザルモ人手ヲ得次第開始スル積リナル由、同氏ハ各種ノ實例中興味アルモノ多數ヲ示サレタル外英國ニ於テ子宮癌最モ多數ナルコト、同氏ノ研究ニヨレバ舌癌ノ最大多數ハ微毒性變化ノ基礎ノ上ニ發生スルコト等種々興味アル話ヲ聞キ申候。

第三ノ Middlesex Hospital 附屬癌研究所ニ就キテモ亦寡聞、初メテ承知セルモノナリシガ元々 Middlesex Hospital ナルモノハ甚ダ古キ二三百年ノ歴史アルモノ、由ナルモ附屬癌研究所ハ Barnato Joel Memorial ト稱シ Henry J. Barnato ナル人ガ其兄弟 Barnett J. Barnato 及甥 W. Joel 兩人ノ記念ノ爲メニ之ヲ寄附セルモノナル由ニテ工事ヲ起セルハ一九一〇年ト申スコトナレバ比較的新ラシキモノニ之レ有リ候、此ノ病院ハ患者收容總數四百中癌患者ニ向ツテ百個ノ病牀ヲ提供シ居ル趣ニテ癌研究所ハ病院トハ接續致シ居ルモ全ク別個ノ建物ニ有之候、該病院ニハ醫學校ヲ附屬シ癌研究所長 Lazarus Barlow 氏ハ同時ニ Middlesex Hospital Medical School ノ實驗病理學ノ教授ヲ兼テ居ルモノニ有之候、Lazarus Barlow ハ Barlow 氏病ノ Barlow トハ全ク別人ナレドモ現代英國病理學者中ノ鏘々タルモノニテ小生ガ今日迄會談セル多數英國病理學者中學識識見共ニ出色ノ様見受申候、小生ハ出シ拔ケノ訪問ナリシニ拘ハラズ半日ヲ割キ他ノ訪問ヲ一切謝絶シテ懇談ノ機會ヲ與ヘラレ一々自家研究ノ標本

ト腫瘍増殖トノ關係ニツキテ研究成績ハ未ダ完成致サル趣ナレド格別ノコト無キ様ニ候、併シビタ
 みる問題ハ英米各大學研究所ニ於テ流行トモ云ヒ得ル程廣ク行ハレ居リ候間仲々面白キ成績ヲ舉グル
 人モ現ハル、ニ至ルコト、存候、次ニ The Cancer Hospitalト稱スルモノハ從來小生ノ寡聞實ハ全ク存
 ゼザリシ次第ナルガ癌病院トシテ今迄見タル英米癌研究所、病院中最モ古キ歴史ヲ有シ且ツ患者收容
 員數モ多數ナルノミナラズ研究所モ比較的二整頓致シ居ルニ驚キ申候、該病院ハ倫敦南西部 Fulham
 Roadニアリ一八五一年 William Marsden ナル醫家ノ建設ニ係リ爾來各種ノ寄附金及遺産ノ寄附等
 漸次資金ヲ増加シ一九一〇年以後ノ寄附金ヲ玄關ニ揭示シアリシモノヲザツト胸算用シタルダケニテ
 十萬磅ヲ超越致シ居ル様ナレバ資產モ甚ダ裕福ナル趣ニ有之小生ハ外科部長 Sir Charles Ryall 氏新
 任病理部長 Dr. Leitch 氏ニ面會致セシガ Leitch 氏ノ談ニモ現今倫敦各大病院ハ何レモ財政難ニ苦
 シミ居ルモ(現ニ倫敦第一ノ大病院タル London Hospital ノ如キモ(患者收容數一千人ノ施療病院)殆
 ンド閉鎖ニ頻シ、有名ナル St. Thomas モ是亦經營難ニテ兩者トモ直ニ種々ナル方法ヲ以テ資金ノ募
 集宣傳ヲナシ居ル有様ナリ)此病院ノミハ其點ニ於テ一向心配無シト申スコトニ有之候、此病院ハ癌
 腫及其他ノ腫瘍及之レニ關聯スル患者ノミヲ收容スルモノニテ收容人員百二十人外來患者ハ元ヨリナ
 レド亞米利加ニテ最モ多數收容スル紐育ノ Memorial Hospital ニテサヘ唯ノ八十人ニ過ギザル次第ナ
 レバ餘程ノ差異ニ有之而モ收容患者ハ悉ク施療ナルコトハ他ノ英國大病院ト同様ニ有之候、建築モ中
 中完備致シ居リ手術ナドモ随分多數アル趣ニテ標本モ能ク整頓致シ居リ直腸癌剔出標本ノミニテモ可
 ナリ多數有之候、Pathological Laboratory ハ病院ト同一建物ノ中ニアリテ數室ヨリ成リ標本室ヲ附屬

英國ニテハ凡テ Radium Tube ヲ用ヒ米國式 Emission 毛細管ハ用ヒ居ラザル様ニ有之候、
 右研究所モ大體 Cancer Hospital ニ似タル規模ノモノニ御座候、
 今回ハ之ニテ擲筆可仕、癌研究會各位ニモ可然御傳聲奉希候 勿々

在倫敦

今

裕

長
與
賢
兄



○今・英國ニ於ケル癌研究ノ近況

ヲ示説サレタルハ中心感謝スル處ニ有之候、同氏ハ多數ノ業績ヲ有シ専ラ Proceedings of the Royal Society of medicine ニ記載セラレ居リ候間既ニ御承知ノコト、存候得共同氏ノ近業トシテハ Radium ヲ用ヒテ癌ノ實驗的研究ヲ企テタル實驗、多量ノ Radium ニヨル組織ノ變化等ニテ Radium ニヨル癌發生ノ實驗ハ Radium Tubes ヲ鼠ノ皮下ニ接種シ又之ヲ膽石中ニ埋入シテ家兎ノ膽囊中ニ入レ其刺戟ニヨリテ上皮ノ増殖ヲ促ガサント試ミタルモノニテ示サレタル標本ニヨリテ見ルモ皮膚ニ於テハ上皮腫性増殖アリ膽囊ニテモ同様増殖アリ只一例ニ於テ膽囊ノ場合ニ轉移ヲ起セルモノアレドモ大體ニ於テ眞ノ癌性増殖ナク刺戟ノ中止ト共ニ消退ストノコトニ有之候、強力 Radium ノ組織ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究ハ最モ興味アルモノニ有之該病院ニハ Radium 5 grms ヲ所藏致シ居リ候、五瓦ノ Radium ヲ有スル病院ハ未ダ聞知セザル處ニ有之候ガ之レハ政府ノ所有ニ屬シ(戰時使用セルモノナリト云フ)之ヲ Medical Research Council ヨリ該病院殊ニ Electro-Therapeutics 部長 Cecil Lister Professor Russ and L. Barlow 氏ニ貸シ下ゲタルモノナル由ニテ(日本ニテモ政府ガ買ツテ大學ヘデモ貸與スルト云フ様ナコトガ出來レバ大變甘イ話ト存候)此五瓦ノ Radium ヲ用ヒテナセル動物組織ノ標本ヲ一々見セテ貰ヒ申候、主ナル事實ハ矢張從來知ラレタル造血臟器及生殖細胞ノ著シキ消耗ノ外筋肉及腎臟ノ脂肪變性、消化管上皮ニ於ケル Desquamation、粘液形成ノ旺盛等ニテ其他身體各部ニ面白キ所見有之候、氏ハ Radium ノ影響ハ全ク特種ノ細胞ノミニ作用スル(例ヘバ睾丸、輸精管上皮ガ全ク消耗シ盡セルニ副睾丸上皮ニハ痕跡ダモ變化ナク、腎臟ノ脂肪變性ノ如キモ全ク曲細管ノミニ限ル等ノ事實)ニヨリ癌細胞等ノ如キニモ特ニ強く作用スルモノナルベキヲ述ベラレ申候。

1) *Brassica campestris* L. (だいこん、かぶら) 及 *Brassica napus* L. (なたね、あぶらな) ヲ以テ作レル混種ノ根部ニハ、結節ヲ形成シ時ニ無數ニ存在シ、其外觀ハ全然腫瘍様ナルヲ以テ、其組織ヲかぶら及あぶらニ移植セルニ、正常組織ノ増殖力ト全ク均等ニシテ、動物ニ於ケル悪性腫瘍ヨリハ寧ろ畸形腫ト比較スベキモノナラン乎。

II) *Beta vulgaris* ノ變種ヲ培養セルニ、其根部ニ腫瘍ヲ形成セリ。其外觀竝組織的造構ハ變種ノ異ルニ從ツテ相異ス。例之 *Mangel* ノ腫瘍ハ圓形、滑澤ニシテ短頸ヲ有シ、剖面ニハ管策配列シ、其狀正常組織ト異ナル所無ク且腫瘍ノ形成ニ因リ、普通ニハ植物ノ發育ニ對シ何等障礙ヲ招來ス。ロトナシ。 *Garden beet* ノ腫瘍ハ甚ダ小ナルニ反シ、 *Sugar beet* ノ腫瘍ハ其發育良好ニシテ不規則ナル塊狀ヲ呈シ、剖面ニ見ル管策ハ其像正常ト異リ、且其配列甚シク不規則ニシテ、其成長ハ植

物ノ成育ニ對シ甚シキ障礙ヲ及ボスコトアリ。

各種 *Beet* ノ腫瘍ハ *Bacterium tumefaciens* ニ因リ生起セラル、コトハ疑ヒ無シト雖モ、腫瘍ノ古キモノニハ既ニ菌ノ死滅ヲ來シ其ノ像ヲ見ズ、反之秋期收穫セル *Mangel* 及 *Sugar beet* ニ發育セル天然生成腫瘍ノ多數例ニ就テ詳細ナル檢索ヲ實施セル結果、菌ノ存在ヲ確證セリ、是等 *Beet* ノ天然生成腫瘍ノ組織ハ、正常根ニ移植スルコト容易ナルノミナラズ、移植セル組織ノ成長ニ伴ヒ腫瘍ヲ形成シ、其造構及外觀ハ原腫瘍ニ一致ス、而シテ移植ハ第三乃至第四世代迄ハ可能ナルモ、第四世代ニ到レバ、移植ニ成效スルモ異常増殖力ヲ消失ス。

天然生成腫瘍ヨリ移植セル組織ノ發育ニ因ツテ生成セル腫瘍内ノ *Bact. tumefaciens* ハ之ヲ分離スルコト難キヲ以テ、結局菌ノ影響ヲ感受セル組織細胞ハ世代ヲ重ヌルニ隨ツテ改變シ、腫瘍細

抄 録

一、植物ノ腫瘍様物形成ニ就テ

C. O. Jensen.

(Meddelelser Fra Den Kgl. Veteriner-Og Land-

højskolen, Serumlaboratorium LIV 1918.)

植物及動物ノ腫瘍様物ヲ比較スルニ際シ、

吾人ハ第一ニ動物ノ腫瘍様物ノ本態ヲ明示セザル可カラズ、即後者ハ一ツノ限局セル細胞群ヨリ發生シ、周圍ノ組織ヲ混在スルコト無ク、單獨ニ腫瘍形成ヲ營ミ、且ツ細胞ノ異常増殖力タルヤ根源の影響ニ對シテハ何等交渉ヲ有セズ、加之細胞ハ分化即チ細胞像ヲ變スル性能ニ乏シク、又周圍ノ正常組織ト置換シ、或ハ該組織中ニ浸潤スル等ノ性能ヲ具有ス。

茲ニ Erwin F. Smith 氏等ニ依リ研究セラレタ

ル "crown gall" ハ今日迄ニ充分研究セラレタル植物腫瘍中唯一ノモノニシテ、其研究ノ結果ニ依レバ二三ノ點ニ於テ多少ノ相異ヲ有スル外概シ動物ノ惡性腫瘍ト同様ナル性能ヲ具有スルコトヲ識レリ。

吾人今回ノ研究ハ其目的、植物ニ於ケル腫瘍様成長ハ可能ナルコト、竝ニ其細胞ハ眞性腫瘍細胞ニ特有ナル、即チ前述ノ如キ増殖力ヲ顯カニ具有スルコト等ニシテ其研究次第次ノ如シ。

一、*Echeveria carunculata* ノ葉ノ表面ニハ其成長期間常ニ特異ノ結節(息肉)發育セルヲ以テ、吾人ハ該結節ヲ構成セル組織ノ生物學的性質ニ關シ、更ニ詳細ナル研究ヲ試ミントセルモ、遂ニ其實驗方法ヲ發見スルニ至ラザリキ。

ルベシ、二例ハ悪性貧血ガ胃癌ノ發生ヲ催進セルモノニシテ二例ハ胃癌ノ結果悪性貧血ガ惹起セラレタルモノナルベシ、然レドモ何レニセヨ悪性貧血ノ在ル場合細密ニ胃癌ノ有無ヲ検査スルコトハ甚ダ重要ナル臨牀の意味アルモノナリトセリ。

(鈴木抄)

三、腫瘍類症鑑別法トシテノX線放射

Seiz und Witz, Röntgenstrahlung als Mittel zur Differentialdiagnose von Geschwülsten. M. med. W. 1920. Nr. 23.

著者ハ結論トシテ述ベテ曰ク、肉腫化セル疑アル筋腫、三四%ノ去勢量(Kastrationsdosis)ニテ放射スベカラズ、皮膚單位量(Haut einheit dosis)ノ六〇乃至七〇%ノ肉腫量ニテ放射スベシ。ソノ結果ニヨリテ肉腫及ビ筋腫ノ類症鑑別ヲ爲スヲ得、即チ腫瘍ノ退化ガ放射後二三日ニテ始マリ四乃至五週日ニテ殆ド凡テ完成セル場合ニハ肉腫ニシ

〇抄
録

テ、三乃至四ヶ月ニテ始マリ一乃至二年ニテ完成セル時ハ筋腫ナリトス、筋腫ノ萎縮ハ卵巢機能ノ廢止ニ基ク二次の現象ナリ、癌腫及肉腫モX線ニヨリ鑑別セラル、コト往々アリ即チ大ナル卵巢肉腫、腹部肉腫ハ感應スルコト速カニシテ且ツソノ程度ツヨク癌腫ハ甚ダ緩慢ニシテ癌腫量ヲ以テセザルカ又ハ腫瘍ガ部分的ニ放射セラレタル時ニハソノ反應ハ一時性ノモノナリ。又淋巴肉腫ト結核性淋巴腺腫トヲ比較スルモ前者ハ反應速カナレドモ後者ハ緩慢ナリトス。

(鈴木抄)

四、胃癌ノ際ニ於ケル「スピロヘー

タ」ノ知見

E. Laubitz: Für Kenntnis der Spirochäten beim Magen karzinom. Med. Klinik 1921. Nr. 5.

最近、ルーゲル及ノイベルゲル兩氏ハ胃癌ノ際空腹時ニ於テ殆ト常ニ胃液中ニスピロヘーテアルノ事實ヲ指摘シコノ際ソノスピロヘーたハ口腔ヨ

胞自己ノ異常増殖力ヲ表現スルモノニシテ、持續的刺戟ハ之レニ影響セザルモノト思考セラル、尙ホ *Bact. tumefaciens* ヲ *Beet* ニ接種スル時ハ腫瘍ヲ形成シ、其發育迅速ナルノミナラズ巨大ニシテ、其外觀及組織的造構ハ共ニ天然生成腫瘍ト諸種ノ點ニ於テ同様ナル像ヲ呈ス、之レ即母體ガ *Sugar-beet* 乃至 *Mangel* ノ組織ナルヲ以テナリ、斯ク人工的ニ作成シ得タル腫瘍ハ移植容易ニシテ、且天然生成腫瘍ノ發育ト全然軌ヲ同フスルヲ見ル外、尙ホ菌ノ接種ニ依ツテ生成セル腫瘍内ニハ *Bact. tumefaciens* 純粹培養ヲ得ルコト容易ナリ、即此點ニ於テ、人工生成腫瘍ハ天然生成腫瘍ト相異ス、而シテ此相異タルヤ接種ニ依リ多數ノ菌ヲ附與スルニ歸因スベキモノナラン乎。

Friedemann 氏等ニ依ツテ "*Stamm-jensen*" ト稱セラレ、且 *Bact. tumefaciens* ノ一異型種トシテ報告セラレタル培養ハ丁抹種ノ *Mangel* ヨリ分離

培養セル *Bact. tumefaciens* ニシテ、丁抹ヨリ輸送セラレタル後ニ不純ニセラレタルモノニ外ナラズ、尙ホ *F* 氏等ノ記錄ニ依レバ、人類ノ病者ヨリ採取セル菌ノ培養ハ *Bact. tumefaciens* ノ場合ト同一ナリト稱スルモ、元來本問題ノ菌ハ斯ノ如キ場合ヲ有スルモノニ非ズ、又 *Blumenthal* 氏竝ニ *Hirschfeld* 氏ハ曰ク、*Bact. tumefaciens* ハ或他種ノ菌ト共存シ、之レニ腫瘍生成能力ヲ移動スルモノナリトノ觀察ハ全然誤謬ニシテ、本問題ハ今尙ホ *Bact. tumefaciens* ニ因ルモノト信ゼントス。

(柏木抄)

二、惡性貧血ト胃癌トノ關係ニ就テ

Brandes, Über die Beziehungen der Perniciösen Anämie zum Magen karzinome. Med. Klinik. 1921. Nr 7.

著者ハ剖檢ノ結果胃癌ト診斷セラレタル四例ノ惡性貧血ニ就テ報告シ、惡性貧血ト胃癌トノ中何レガ初發ナルカヲ確實ニ決定スルコトハ不可能ナ

著者ハ子宮癌腫、筋腫等ニ對シ充分ナル效果ヲ現ハスX線療法ハ理論上皮膚癌、及他ノ表在性腫瘍ニ對シ尙效果アル可キ理ナルニ事實ハコレニ反セル結果ヲ示スハ如何ナル理由ニ基クヤノ疑問ヲ懷キノ理ヲ解決シ且ツ表在性腫瘍ニ對スル放射法ヲ改良シタリ、

深部ニアル腫瘍ニ對スルト同一方法ニテ表在性腫瘍ヲ放射スルハ不可ナリ、コレ重要ナル差トシテ後者ニ於テハ皮膚面ト腫瘍面トノ差殆ド無之ヲ以テナリ、故ニ可ナリ皮膚ニ管ノ焦點ヲ近ヅク可シ然レドモアママリ近ヅクル可カラズ、コレコノ際腫瘍ノ厚サハ甚ダ少數糧ニテモ顧慮ノ要アレバナリ、又甚ダ硬キ線ヲ使用スルノ要ナシ、コレ深達ノ要ナキヲ以テナリ、各例ニヨリ腫瘍ノ厚サニシ

○抄 録

タガヒ緊張度及ビ濾過板ノ厚サヲ變更スベシ。又二分野放射ヲ以テ充分トシ第二野トシテハ反對側ヨリ甚ダ硬キ光線ヲ以テ重濾過板ヲ用ヒテ腫瘍ノ方面ニ放射スベシ次ニ又放射ハ時々集注スベシ。

最後ニ第二光線ヲ放出セシムルコトヲ爲サザル可カラズコハ反對側ヨリ放射セル場合ニハ必ズ存在スルモ皮膚面ニ於テ最モ微弱ナリ、腫瘍側ヨリ放射セル時モ亦シカリ、故ニ著者ハ次ノ方法ヲ案出セリ、即チ表在性腫瘍ヲ深部腫瘍トナルヤウソノ位置ニ變更セシムルナリコレニハ水ヲ入レタルごむ球又ハごむ囊、蠟、ばらふん板、寒天、白金板、有機性物又ハ金屬粉末ヲ以テスル囊ニ輕金屬ノ撓屈性板ヲ用ヒ得ルモ、就中、水、油、ばらふん、半流動寒天又 げらんヲ入レタル薄壁ノ囊ヲヨシトス、腫瘍ノ場所又ハソノ位置ニアリテ厚サヲ變ジウルヲ以テ便利ナリ、

又腫瘍ト囊トノ間ニぐったべるかヲ入レ傷液ヲ

リ來リシモノニシテ腫瘍ノ潰瘍部ニ就腐敗性ニ寄生セルモノトセリ而シテコノ所見ハ單純潰瘍又ハ健康人胃液中ニテハ陰性ナルヲ以テ鑑別診斷上ノ意義アルモノナリトセリ。

ルーゲル及ノイベルゲル兩氏ハ胃液ノ胃液塗擦標本ヲ檢索シタルガ著者ハ胃ノ組織標本モ製作シテすびろへーたノ分佈狀態ヲ檢シタリ、十二例ノ胃癌、三例ノ食道癌及ビ十例ノ對照ヲ檢索セリ、其結果對照例ニ於テハ一例ヲ除キテ食道癌ニテハすびろへーたヲ發見セズ、胃癌例ニテハ九例ニ陽性ナリキ、其中二例ニハ甚ダ少數ニシテ三例ニハ組織標本ニハナカリキ、胃液塗擦標本ニテハ陽性ナリキ、すびろへーたノ所在地ハ潰瘍面又ハ縁ニアリ、健康ナル胃粘膜中ニハナシ而シテコノ際他ノばくてりえんと共ニ存ス、而シテすびろへーたハ時ニ運動ニヨリテ深部組織ニ入ルコトアリ、すびろへーたノ形態ハ種々ナリ。轉移竈ニすびろ

へーたヲ發見セザリキ。

ルーゲル—ノイベルゲル兩氏ハすびろへーたガ胃腺中ヨリ來ルコトモ可能ナルコトヲ云ヘルモノニハ正當ナラズ。
(鈴木抄)

五、喉頭癌及咽頭癌ノ光線療法

Amersbach: Zur Strahlenbehandlung des Kehlkopf- und Rachen karzinoms. D. m. W. 1920. Nr. 6.

豫後良好ナル内部喉頭癌ハ絶對的ニ手術ヲ施サザル可カラズ、而シテ手術前ノ放射ハ爲ス可カラズコレカヘツテ有害無益ナルヲ以テナリ。手術後光線療法ヲ爲スハ價值アリ、然レドモ可成の形成的手術前ニハ爲サザルヲ宜シトス手術不可能ナル腫瘍ガ光線療法ニヨリテ手術可能トナルコトアリ、光線療法ノミヲ以テシテハ喉頭癌、咽頭癌何レモ今日迄ノ所治癒セルコトナシ。
(鈴木抄)

六、表在性悪性腫瘍ノ光線療法

量ノ油ト混ジタルべんつおーるヲ與ヘタリ、コレベ
んつおーるノミニテハ口腔炎ヲ起スコヲ以テナリ。
コノ際再三、中毒症狀ヲ惹起シタリシ、全體ノ結
果トシテハ著者ハべんつおーるガ本腫瘍ノ發育ヲ
防止スル作用アルコトヲ確メ得タリ、すだんヲ混
ズルモ、べんつおーるノ作用ニ影響ナカリキ、著
者ハ人間ノ手術不可能ナル腫瘍ニテモ通常使用ス
ルノ無害ナル用量ニ於てべんつおーるヲ使用シウ
ベク、若シクハ他ノ療法ト併合セシムルコトノ可
ナルヲ述べタリ。

(鈴木抄)

九、癌ニ於ケル自家融解物^{アウトリゾート}ノ作用

ニ關スル化學的及ビ治療的研究

Bosch, Chemische u. therapeutische Unter-
suchungen über die Wirkung von Autolysen
bei Krebs. (Zeitschr. f. Krebsforschg. Bd. 16,
1919, H. 3 S. 325).

從來あうごりざーごヲ以テ行ハレタル實驗報告

〇抄
錄

ノ不同ナルヨリシテ、著者ハ自カラ Herzfeld u.
Zimnerガ報告セル方法ニ從ヒテ、種々ナリ材料ヨ
リ製出セルあうごりざーごノ作用及保存性ニ關ス
ル要約ヲ仔細ニ檢索シタリ、其結果ハ先ヅ第一ニ
同様ノ方法ヲ以テ作ラレタル多クノ腫瘍あうごり
ざーごハ凝固セル腫瘍蛋白質ニ對スル蛋白質分解
作用ガ極メテ不同ナル事ナリ、此不同ナル原因ハ
一部分ハ使用セル材料ノ種類ノ異ルガ爲メ(核ノ多
少、製作時ニ既ニ自然ニ生ゼラレアリタル自家融
解性變化等)、一部ハ保存法ノ如何ニ基ク者トナセ
リ、尙ホあうごりざーごノ試験管内ニ於ケル分解
能力ハ主トシテあうごりざーご内ニ含有セラル、
分解產物ノ濃度如何ニ關スル事最モ大ナリ、尙ホ
其他著者ガ製作シタルあうごりざーご(攝氏三七
度三日間自家融解、以後零度ノ冰室内保存)ハ之ヲ
濾過セズシテ冰室内ニ保存スル時ハ一ヶ月間ヲ經
ルモ其蛋白質分解作用ヲ失ハズ、之ニ反シあうご

防ギ、且ツ、⁶たべるカヲ消毒シウルヲ以テ利アリ、第二放射ニテ充分皮膚ヲ壓迫シ貧血性トナシ居キ、放射ニ對スル感受性ヲ低減シオクト又利アリ、要スルニ本法ニアリテ表在性腫瘍ヲ深部ノモノニ變ジ、深部放射ヲ行ヒウルヤウニナスナリ。

(鈴木抄)

七、癌細胞ニ對スルX線致死量

Wood, Carter and Prime, *Friedrich: Leukämie of Roentgenray for cancer cells* (The Journal of the Amer. Med. Assoc. 14 74, 1920, No. 5)

三耗ノあるみにうむ板ヲ濾過セルX線ノ作用ヲ廿日鼠癌及肉腫ニ對シ檢シタリ、試験管中ニテハ約四紅斑量ハ乳腺癌ヲ、五紅斑量ハ乳腺肉腫ヲ死滅セシム、時ニ六紅斑量ニテモ、二三ノ細胞生存セルコトアリ、體內ニ於テハ六紅斑量ハ癌腫及ビ肉腫ヲ死滅セシム、試験管中ニテ四紅斑量ヲ以テ處置シタル肉腫ハ尙移植性ヲ保有セリ、組織培養

ニテ癌腫及ビ肉腫ヲ死滅セシムルニハ少ナクモ六紅斑量ヲ要シ胎生時結締組織細胞ヲ死滅セシムルニハ四紅斑量ヲ要ス、放射後細胞分割像ヲ缺ケタルコトハ、移植性ヲ失ヘルノ徴トナス能ハズ。

(鈴木抄)

八、腫瘍ノ實驗的研究

Somogyi R: *Experimentelle onkologische Studien* (Zeitschr. f. Krebsforschung, Bd 12, 1919, II, 1.)

著者ハ多數ノ實驗例ヨリシテ、雙兒ニ同質ナル腫瘍移植材料ノ同一量ヲ同時ニ同ジ場所ニ移植スル時ハ多クノ場合同一性質ノ腫瘍ヲ發生シ大サ、形態同ジナリ、若シ一頭ニ試験セントスル何等カノ處置ヲ施ストキハ處置セザル一頭ヲ對照トシテ比較スルトキハ腫瘍ノ重サソノ形態上ノ性質ヨリ該試験處置ノ結果ヲ推シウルナリ、コノ立脚點ニ立チテ著者ハ可移植性紡錘狀大鼠肉腫ニ對スルベ

んつゝるノ作用ヲ檢シタリ、著者ハ經口的ニ同

ス、刺毛嵌刺ニ依ル慢性刺戟ノ結果トシテ炎症ヲ生ジ、ひべるけらごーゼヲ伴フ著明ナル粘膜肥厚ヲ呈シ、更ニ粘膜ノ壊死及ビ潰瘍形成ヲ來シ、此變化ハ漸次其周縁部ニ於テ進捗増大ス、燕麥飼養ヲ停止スレバ此變化ハ停止シ、終ニハ全ク正常ニ復歸スルニ至ル、Stahr 或ハ Secher ノ實驗ニ於ケル斯クノ如キ變化ハ嚴密ナル意味ニ於テノ眞正ナル癌腫ノ初期トハ認メラレズ。

然ルニ著者 (Secher) ハ唯其一例ニ於テ眞正ナル癌腫ヲ發生セシメ得タリ、即チ角質化ヲ呈スル扁平上皮細胞癌ニシテ顯著ナル浸潤性發育ノ狀ヲ呈ス。

著者ハ更ニ此實驗ニ使用セルらつてノ品種及ビ種ニ關シテ言及セリ、即チ此變化ハ種々ナル產地ノ bunte Laboratorienratten ニモ、亦 braune Ratten (Mus decumanus) 及ビ Schwarze Ratten (Mus rattus) ニモ同様ニ惹起セシメ得可シ、唯著者ニ據

レバ或一定數ノ實驗ニテハ Schwarze Ratten ハ確カニ他ノ種又ハ品種ノらつてヨリモ此刺戟ニ對スル感受性尠ナルガ如シト。

(木村抄)

十一、大ナル有機化學的工場内ノ

労働者ニ認メラル、惡性膀胱腫

瘍ニ就テ

Nassauer, Über bösartige Blasengeschwülste bei Arbeitern der organisch-chemischen Gross-industrie. (Frankf. Zeitschr. f. Path., Bd. 22, 1920, II, 3.)

從來報告セラレタル諸例、及ビ著者自カラノ觀察ヲ基礎トシテ著者ハ膀胱惡性腫瘍ノ發生ニ對スルあにりんノ意義ニ關スル研究ニ就キテ、精細ナル批判的考察ヲ行ヒタリ、此業績ガ特ニ價値アル者ナル事ハ著者 Nassauer 氏ガ化學者ナルガタメニ化學的問題ヲ充分ニ判斷シ得ルニ好適セルノミナラズ、又實ニ氏ガあにりん色素ノ外尙ホあにりん色素製造ノ中間產物ヲモ主トシテ、製出スル工

りざーと療法ニ際シ靜脈内注射ニ使用センガタメ之ヲ濾過シタル濾液ハ保存性甚ダ短キ者ナリ、種種ナル臓器ヨリ得ラレタルあうごりざーとモ亦是等ノ點ニ於テハ腫瘍あうごりざーと同様ナル溶液ナル事ヲ示ス、腫瘍蛋白質ハ細胞及ビ核ヲ富ハスルガ如キ臓器ニ依リ最モ分解セラレ易シ、尙ホ癌患者ニ於ケル新陳代謝ノ研究ヲモ行ヒタルガ其成績ハ種々變差アリ、あうごりざーとノ治療的實驗ヲ行ヒタル三十名ノ患者ニ關スル成績ハ、治愈ハ皆無、其數例ニ於テ一時的ニ腫瘍發育ノ停止ヲ見タルモ、他ハ何レモ進行的ナリキ、尙ホ不快ナル副作用ハ一回モ生ゼズ、結局著者ハ次ノ如キ歸結ニ言及セリ、即チ「癌ヲ一種ノ新陳代謝障礙ト認メテ、其窒素排泄ヲ變化シ、血液ノ蛋白質分解機轉ヲ促進セシムル事ニ依ル内的治療法ハ可能的ニシテ且ツ有望ナルガ如シ」ト。

(木村抄)

十、燕麥飼養ガらッてノ舌ニ及ホ

ス作用ニ關スル研究(潰瘍形成、癌發生)

Secher, Untersuchungen über die Wirkung der Hafterverfütterung auf die Zunge von Ratten (Ulcerationsbildung, Karzinomentwicklung) Zeitschr. f. Krebsforschg. Bd. 17, 1919, H. I, S. 80.

著者ハらッてヲ長時日燕麥(之ハ燕麥ノ外殼附著ノ儘ニテ其刺毛ヲ共ニ食セシムル法ナリ)ヲ以テ飼養スル事ニ依リ、其舌ニ腫瘍様反應(Geschwulstähnliche Reaktion)ヲ生ゼシメ得可ク、且ツ少ク共惡性上皮細胞腫ノ前期期(zum mindesten als Vorstadium eines bösartigen Epithelioms)ト認メ得可キ所見ヲ發表セル Stahrノ實驗ヲ追試シタリ、著者ハ燕麥飼養ニ依リラッてノ舌ノ或者ニシテ「ガ記載シタルト全然同一所見ヲ有スル變化ヲ惹起セシムルヲ得タリ、此變化ヲ生ズルハ殆ンド常ニ燕麥刺毛ノ嵌刺スル同一部ニシテ、主トシテ、舌粘膜ノ輪廓乳頭(Papilla vallatae)ノ所ヨリ

唯前記Nassauerノ報告ニ關聯セルト、あにりん蒸氣吸入ニ依ル腫瘍發生(膀胱)ノ從來ノ報告例等ニ言及セルヲ以テ茲ニ抄録ヲ試ミタリ)

著者ハ先ヅ從來此方面ニ於ケル文獻及報告例ニ就キ記載ヲ試ミ一八九五年Rehnノ有名ナル報告後、あにりん工場労働者ノ膀胱腫瘍發生ニ關シ、該腫瘍發生ト慢性あにりん中毒トノ關係ハ非常ナル興味ト注目ヲ喚起シタルモ、此關係ノ充分ニシテ満足ナル解釋説明ハ今日猶ホ不明ナルヲ敍シ從來ノ文獻ニ關シテハLeuenberger (1912) 及ヒNassauer (1910)ノ報告ヲ參照シ、殊ニNassauerニ依レバ從來報告セラレタルあにりん腫瘍ハ六一例ニシテ、之ニN氏自己ノ二八例ヲ加フル時ハ今日迄知ラレタルあにりん腫瘍ノ例數八九例ナリ。

是等ノ發生數ト他ノ場合ニ膀胱腫瘍ノ發生稀ナル事トヲ對比スル時ハ、Leuenberger, Nassauer 兩氏ガ既ニ切言シタルガ如ク、あにりん工場労働ト

腫瘍發生トノ間ニ何等カノ關係ノ存スル事ハ何等疑フノ餘地ナシ、唯更ニ動物實驗ノ方法ニ於テ此重要ナル問題ヲ解決シ得可キカヲ試ム可キ必要アルヲ思ハシム、唯此場合ニ困難ヲ感ゼシムルハあにりん腫瘍發生ハ工場ニ勞働スル事二十年ノ後初メテ認めラル、者ナルガ故ニ、實驗動物ノ如ク短命ナル者ニ其目的ヲ達シ得可キカ否カニアルモ、一般ニ斯クノ如キ動物ニテハ腫瘍發育モ亦迅速ナル事ハまうす癌ノ如キ者ニテ吾人ガ認ムル所ナレバ、或ハ全然絶望ナラザル可シ、特ニ言及セザル可ラザルハあにりん自己ニハ確カニ腫瘍發生ノ原因ヲ求メ得可ラザル事ニシテ、あにりん攝取後動物體內ニ何等カノ物質ヲ生シ其物ガ尿ニ依リ排泄セラル、ニ當リテ、絶エズ膀胱粘膜上皮細胞ヲ刺戟シ其ニ依リ腫瘍發生ヲ促進スル者ナリト思考セラル、事ナリ、而シテ斯クノ如キ刺戟ハ絶エズ或ハ頻繁ニ反復シテ一定部ノ上皮細胞ニ傷害

場ニ於テ約二十年間モ自ラ親シク、技術的指導ニ從事シ居レルヲ以テナリ。

既ニ Reim ガ初メテ觀察シタルガ如クあにりん蒸氣吸入ト膀胱腫瘍ノ發生トノ間ニ一定ノ關係ヲ存スル事ハ最早疑フノ餘地ナシ、色素工業ニ於ケル種々ナル化學的物質中膀胱腫瘍ノ發生ニ關係アルヲ云ヒ得ラル、ハあにりんアルノミ、蓋シあにりんガ有害ナル事ノ熟知セラレザリシ以前ニハ、勞働者ハ釜或ハ導管ノ隙間ヨリ噴出スルあにりん蒸氣ヲ絶エズ吸入セルナリ、尙ホべんちん工場ノ勞働者ニ見ラル、膀胱腫瘍モ其發生ハべんちん製造ニ際シ生ゼラル、あにりんノ作用ニ歸セシメ得可シ、然レドモあにりんヲ含有セザル純粹ノべんちんガ無害ナル確實ナル證明ハ充分ナル動物試験ヲ行ヒタル後ナラデハ決定セラレズ。

あにりん蒸氣ヲ吸入シ初メテヨリ後、初メテ疾病症狀ヲ呈スルニ至ル迄ノ時日ハ、あにりん蒸氣

ノミヲ吸入スルカ或ハあにりん蒸氣ノ外ニ尙ホ吸入セルベキ混在物アルカ否カニ依リ種々異ナレリ、あにりん蒸氣ガ純粹ナル者ナル程腫瘍發生ノ時期遅シ、空氣ノ混入ハ此場合重大ナル意義アリ、直接あにりん蒸氣ニ接觸吸入セズシテ、其周圍ノ建物中ニ在リテハ空氣ニ依リ稀薄トナリタルあにりん蒸氣ヲ吸入スル勞働者ハ、短時日中ニ腫瘍ヲ發生ス、尙ホ其外一定ノ體質及ビ身體ノ健康狀態等モ關係アリ、通常疾病症狀ノ發現スルハ二十年乃至其以上ヲ經タル後トス。

(木村抄)

十二、長時日間ノあにりん吸入作

用ニ關スル實驗的研究

Jaffé, Experimentelle Untersuchungen über die Wirkung langdauernder Anilin-Inhalation. (Centralbl. f. allg. Path. u. path. Anat. 141, 37, Nr. 3, 1920.)

(譯者曰、此報告ハあにりん蒸氣吸入ニ依リ動物ニ膀胱腫瘍ヲ發生セシメントノ企圖ナリシモ結局其目的ヲ達セザリシ者ナリ、

いでいん、べんちん及ビなふちるあみんヲ使用シ實驗動物トシテハまうす、らって、家兎ノ三種ヲ使用シ其技術ヲ詳述シ、結局所期ノ如ク腫瘍發生ノ目的ヲ達スル事能ハザリシモ、各動物ノ生存期間及ビ肺、心臟、肝臓、腎臓、脾骨髓等ノ所見ヲ詳説シ結局次ノ如キ結論ヲ述べ居レリ。

一、あにりん、ごるいでいん及なふちるあみんノ蒸發瓦斯ニまうす、らって、家兎ヲ各三匹宛絶エズ曝露吸入セシメタリ、各動物ハ此操作ニ際シ平均六ヶ月間生存セリ、通常四ヶ月乃至一年間生存ス。

二、此方法ニ依リ膀胱ニ一回モ腫瘍ノ發生ヲ認ムル事能ハザリキ。

三、肺臓ニハ常ニ一定ノ變化ヲ認メラル、即チ高度ノ充血、——化膿性氣管枝及氣管枝周圍炎——氣管枝肺炎浸潤及ビ屢々壞死ヲ伴フ膿瘍ヲ生ズ、是等ノ變化ハ蒸氣吸入ニ依ル化學的作用ノ結

果ニ依ル者ト認メラル。

四、腎上皮細胞及ビ心筋ノ脂肪沈著ハ一二ノ例ニ於テ遭遇セルノミニシテ常存性變化ナラズ。

五、肝臓ハあにりん及ビごるいでいん吸入動物ハ脂肪沈著ヲ、なふちるあみん吸入動物ニテハ壞死ヲ認メタリ、尙ホ其外何レモ圓形細胞浸潤ヲ伴フ結締組織増生ヲ呈ス。

六、此肝臓ニ於ケル變化ハ實驗的肝硬變ニ認メラル、ガ如キ所見ニ一致スル者ニシテ、尙ホあにりんガ血液障礙性毒物ニ屬ス可キ重要所見ノ一タルベシ。

七、血液障礙ノ證左トシテ脾臓ニ於テ甚ダ廣汎ナル鐵色素ノ沈著アリ、肝星芒細胞中ニモ少量ニ沈著アリ。

八、故ニあにりん職工ニ肝硬變ノ頻發スルカ否ヤヲ注意シテ觀察ス可キ必要アリ。(木村抄)

十三、肺動脈ノ癌腫性血栓性動脈

ヲ及ボシ、更ニ其結果上皮細胞ノ再生ヲ致ス、此反復生ジ來ル上皮再生ハ上皮細胞ノ自働の發育能力ヲ來シテ終ニ腫瘍發生ヲ惹起スベシ、假令吾人ガ是等ノ實驗ニ於テ腫瘍發生ノ目的ヲ達スル能ハズトスルモ、粘膜上皮細胞ノ傷害或ハ更ニ顯著ナル再生ヲ證明スルヲ得ルノミニテモ充分ナル結果ヲ得タリト云フヲ得可キナリ。

從來ノ文獻中是等ノ事ニ關シ充分ナル報告ナシ、唯一ツ Posner u. Hultschiner ノ實驗アレドモ充分ナル結果ヲ得ザリシガ如シ、恐ラク其他ニモ種々ノ實驗ヲ試ミラレアリタルナランガ其成績所期ノ如クナラザルガタメニ發表セラレザルナラン、實驗方法中あにりんヲ直接動物ニ注射スルガ如キハ恐ラク所期ノ結果ヲ得難カルベシ、斯クノ如キハ其手段餘リニ粗略ニシテ其中毒モ亦餘リニ急劇高度ナレバナリ、故ニ實驗方法トシテ著者ハ出來得ル限りあにりん工場ニテ職工ガ曝露セラレ

アルト同様ノ狀態ニ、試驗動物ヲ數ヶ月數年ノ間あにりん蒸氣ヲ吸入セシムルノ方法ヲ最良ト思考シタリ。

第一ニ考察セザル可ラザルハ如何ナル物質ヲ蒸發吸入セシム可キナリ、是レ從來ノ文獻ニ依レバ種々ナル物質ガ有害性ナル事ヲ舉ゲアレバナリ、あにりん以外屢々其有害ナルヲ報告セラレアルハごるいでいん、なふちゝるあみんニシテ、べんちゝんモ亦有害ナリトセラレアリ、著者ハ其實驗ニ此四種ノ物質ヲ吸入セシムル方法ヲ採リタリ、Zisser 及びいでいん及びなふちゝるあみんハ其ニ無害ナリトシ、問題ハべんちゝん及びあにりんノ二者ニ存スルモ純粹ノべんちゝんハ全然無害ニシテ、べんちゝん製出ノ際發生スル少量ノあにりんガ有害ニ作用スルナリト意見ヲ持シ、あにりんヲ唯一ノ爲害性物質ナリト認メ居レリ。次ニ著者ハ自己ノ實驗ニ於テハあにりん、ごる

van Rijssel, Keuschelensartkoorn van de Schinl-
klier en het pankreas. (Nederl. Tijdschr. v.
Geneesk., 1919, II, 2, Nr. 25.)

甲狀腺ニ肉腫ノ發生ヲ見ルハ既ニ稀有ノ事ナル
ガ巨態細胞肉腫ニ至リテハ一層稀ナリ、著者ハ七
十歳ノ男子ニ甲狀腺左葉ノ部ニ拳大白色柔軟結節
狀ノ腫瘍ノ發生アリ、其腫瘍ハ氣管ノ後方ヨリ其
ヲ包裹スルガ如ク發育シテ、氣管ヲ右側方ニ壓排
セルヲ見タリ、腫瘍斷面ハ一部壊死ニ陥リ一小部
ハ石灰沈著アリ、腫瘍組織ハ頸部血管ノ外周ニ沿
ヒテ増生シ、内頸靜脈内ニハ腫瘍性血栓アリ、肺
ニ無數ノ移植アリ、組織學的ニハ該腫瘍ハ巨態細
胞肉腫ノ狀ヲ呈シ、紡錘形及ビ不規則ナル單核細
胞ノ外腫瘍ハ至ル所ニ主トシテ中心部ニ存スル核
ヲ有スル巨態細胞ノ多數ヲ有ス、間質結締組織ハ甚
ダ僅少ナリキ。

第二例ハ二十五歳ノ男子、ぶろーべらばらこみ

○抄 錄

一 後化膿性腹膜炎ノ症狀ノ下ニ仆ル、臍臟部ニ當
リ壊死及ビ化膿竈ヲ密發セル大ナル柔軟ナル腫瘍
アリテ、提肝靱帶及ビ肝臟内ニモ腫瘍ノ侵入アリ、
他ノ部分ニハ轉移ヲ認メズ、組織學的ニハ該腫瘍
ハ甚ダ多數ノ巨態細胞ト僅少ノ間質ヲ有スル多形
細胞肉腫ノ像ヲ呈シ、尙ホ腫瘍間質内ニハ多數ノ
血管ヲ富有セリ。

二例共腫瘍組織内ニ囊腫樣變化ヲ認メザリキ。

(木村抄)

十五、左側肋膜ニ滑平筋腫、右側

肋膜ニ内皮細胞腫ノ發生ヲ見タ

ル例

Kornitzer, Zur Kenntnis der Pleuratumoren:
Lebomyom der linken Endothelium der rech-
ten Pleura. (Berl. Klin. Wochenschr., 1919, Nr.
14.)

四十歳ノ兵士、同一人ノ同一臟器系統ニ二種ノ
異リタル原發腫瘍ノ同時ニ發生セル例ニシテ、左

内膜炎ノ一例ニ就テ

Ceelen, Über einen Fall von Thromboembolie
mitts pulmonalis carcinomatosa. (Med. Klin., 4,
1920.)

本例ハ人體内ニ於テ腫瘍細胞ガ無害性ニセラレ
或ハ死滅セシメラル、好適例ナリト思考セラル。

二十八歳ノ男子胃疾患ノ爲メ胃腸吻合術ヲ施サ
レタル後一年ニシテ呼吸困難脈搏頻數心臟機能減
退ノタメ死ノ轉歸ヲ取リタル者ニシテ、剖檢ニ依
リ著明ナル右心室ノ擴張性肥大アリ、肺ハ左側ニ
氣管枝擴張アリタルノ外、兩肺共ニ到ル所帽針頭
大灰白色結節アリ、胃ハ小彎部ニ榛實大放線狀ニ
陷凹セル硬固ナル病竈アリ、胃ノ周圍ニ存スル淋
巴腺ハ腫大硬結ヲ示ス、組織學的ニハ肺ノ結節ハ
肺動脈細枝ノ閉塞ニシテ、一部ハ結締織物質一部
ハ尙ホ新鮮ナル或ハ機化セル血栓ナル事ヲ示ス、
閉塞セラレタル血管枝周圍ハ著明ナル結締織增生

ノ狀ヲ呈ス、血栓中ニハ新舊種々ナル壞頰狀態ヲ
呈セル癌細胞ノ混在アリ、腫大淋巴腺モ亦癌性浸
潤ヲ呈シ、胃ノ瘢痕狀竈ニハ小數ノ癌細胞ノ存在
アリテ其原發竈ナル事ヲ示ス、凡テ癌性浸潤部ハ
到ル所著明ナル結締織增生ノ傾向ヲ示ス、肺轉移
ハ淋巴腺浸潤ヨリシテ胸管ニ入り來レル道ヲ取リ
タル者ナルベシ、脾臟腎臟ニ散在性ニ癌細胞栓塞
アリタルハ癌細胞ガ罅隙狀ニ開在セル卵圓孔ヲ通
過シタル者ト認メラル、是レ大ナル癌細胞ガ小ナ
ル肺毛細血管ヲ通過シ得ルガ如キハ思考シ得可ラ
ザレバナリ、癌巢周圍到ル所ニ多數ノぶらすま
細胞ノ發現セルハ、癌腫ニ於テ其周圍ニ限界性ニ
發現スルぶらすま細胞層ハ、癌腫ノ經過ガ良好ナ
ル程著明ナリト云ヒタル Unna ノ意見ニ一致ス
ル者ナリト云ヒ得可シ。

(木村抄)

十四、甲狀腺及ヒ脾臟ノ巨態細胞
性肉腫

●評議員會記事 大正十年二月十六日評議員會

開會決議事項左ノ如シ。

一、大正九年度庶務會計報告ニ關スル件

一、大正十年定期總會開催ニ關スル件

一、名譽會員推薦ニ關スル件

●名譽會員推薦 本會定款第十三條ニ依リ左ノ

諸氏ヲ名譽會員ニ推薦セリ。

西脇 濟三 郎君 諸 戸 清 六君

八十 島 誠之君

●第二回理事會記事 大正十年二月十六日理事

會開會決議事項左ノ如シ。

一、癌研究補助費追加ノ件

一、授賞論文審査決定ニ關スル件

○雜報

●癌研究費追加補助 大正十年度ニ於テ醫學博

士川上漸氏ニ對シ金五百圓補助スルコトニ決ス。

●第三回理事會記事 大正十年二月二十二日理

事會開會決議事項左ノ如シ

一、らぢうむ療法打合ニ關スル件

一、監事増員ニ關スル件

●社團法人癌研究會第十四回定期總會並ニ第十三回

學術集談會記事

大正十年四月三日午前八時ヨリ東京帝國大學醫

學部病理學教室ニ於テ第十一回日本病理學會ト合

同シ本會第十四回定期總會並第十三回學術集談會

ヲ開催セリ、出席者ハ本多會頭、土肥副會頭、長

與理事長、高木、細野理事及長與、中村日本病理

胸腔ニ滑平筋纖維腫ノ林檎大ナルモノアリテ、左肺後面ヨリ發生シ左肺後面ト纖維索ヲ以テ連續シ、此連結纖維索ハ腫瘍表面ト同様ニ肋膜内皮細胞ヲ以テ被覆セラレアリ、他側ニ發生セル内皮細胞腫ハ多數ノ轉移ヲ生ジ且ツ此滑平筋纖維腫内ニモ顯微鏡的小ナル轉移ヲ見タリト云フ(木村抄)

十六、廣汎ナル水腫ニ見ラレタル

腦下垂體神經部ノこりすこゝむ

Sternberg, Ein Choristom der Neurohypophyse bei ausgebreiteten Oedemen. (Centralbl. f. allg. Path. u. path. Anat. Bd. 31, Nr. 7, S. 180.)

六十五歳ノ男子、廣汎ナル高度ノ水腫アリタルモ臨牀的ニ説明シ難ク又種々ノ藥物モ其效果ナカリキ、剖檢ニ依リ胃癌ヲ認メタルモ臨牀上ニハ何等ノ症狀ナカリシナリ、其外ニ腦下垂體神經部ニ小腫瘍アリテ大ナル細胞、神經節細胞或ハ巨態

りハ細胞ヨリ成ル、即チ此神經成分ヨリ成ル腫瘍ガ腦下垂體神經部ノ機能亢進即チ利尿制止作用ノ増強ヲ來シタルガタメ、著明ナル水腫ヲ生ジタル者ト説明スルヲ得可シ、此患者ニ就テ行ヒタル新陳代謝試驗ニテハ實ニ水分排泄ノ高度ノ障礙ト著明ナル食鹽停滯ヲ示シタルナリ。

討論 Schmorl.

上記ト同様ナル例ニシテ又同ジク胃癌ノアリタル例ヲ見タリ、到ル所ノ淋巴腺ハ癌ノ浸潤ヲ蒙リ、尙ホ癌ノ侵入ハ皮膚乳嘴體ニモ及ビ居タリ、内臓ニハ何等ノ轉移ヲ認メザリシモ全身淋巴管系ニ轉移ヲ認メタリ、故ニ水腫ハ此淋巴系統ノ變化ヲ以テモ説明シ得可キニアラズヤト。(木村抄)

醫學博士

〔川〕村 麟也 (新潟)

八、ばらふんニ因ル家兔肺臟組織ニ

於ケル上皮細胞ノ異常増殖ニ就キテ (豫報)

井 深 健 次 (東京)

九、神經切斷ガ移植腫瘍増殖ニ及ボス影響

醫學博士

〔末〕安 吉 雄 (京都)

一〇、癌ノ移植ニ關スル一二ノ試験

醫學博士

〔長〕與 又 郎 (東京)

一一、鼠癌轉移ニ關スル實驗

〔麥〕沼 憲 二 (東京)

一二、まうす癌ニ對スル抗體發生實驗 (第一回報)

醫學博士

〔山〕極 勝 三 郎 (東京)

一三、南京鼠癌ノ移植試験就中生殖腺トノ

關係ニ就テ

淺 田 爲 義 (福岡)

○雜 報

一四、孵化鳥卵内ニ於ケル腫瘍移植ノ

實驗的研究。第五報告。大黒鼠家兔及

家鶏腫瘍ノ孵化鳥卵内移植。附家鶏

粘液肉腫ノ異種族成熟鳥移植ニ就テ

醫學博士

〔清〕野 謙 次 (京都)

一五、びちろーる注射ニ因ル舌上皮ノ

達型増殖ニ就テ (第一回報告)

本 田 郁 也 (京都)

一六、人工的乳癌動物示説

醫學博士

〔山〕極 勝 三 郎 (東京)

一七、らのりん飼養ト人工的たゝる癌

發生トノ關係 李 君 惺 (東京)

一八、鳥類ニ於ケル諸種脂肪試驗報告 (第三)

豚脂試食ガ可移植性家鶏纖維腫ノ移

植ニ及ボス影響ニ就テ

赤 松 信 麿 (京都)

學會正副會長、醫學博士山極、藤浪、入澤、速水、川村、角田、木村、緒方、草間諸氏其外多數ノ會員並ニ來聽者ヲ以テ充サレ頗ル盛大ナリキ、午前八時開會本多會頭先ヅ開會ノ辭ヲ述ベテ次、大正九年度ニ於ケル役員及會員ニシテ逝去セラレタル。

評議員醫學博士男爵高木兼寛君、特別會員醫學博士佐藤勤也君、通常會員長町耕平君、醫學博士谷口長雄君、寺田繩尾君、橋本左武郎君、飯田庄八君、醫學博士瀨川昌者君、醫學博士筒井八百珠君ノ爲メ會員一同ノ起立ヲ乞ヒテ弔意ヲ表シ、次、細野理事ノ前年度庶務會計報告（第十五年第一冊雜報參照）アリテ後監事一名増員ニ關スル決議案ニ對シ滿場一致ヲ以テ可決ス、次、本多會頭ノ懸賞論文審査要旨報告アリタル後京都帝國大學醫學部病理學教室赤松信麿君ニ賞記並ニ賞金ヲ授與セラレ、終リテ學術集談會ニ移リ左記ノ諸演說アリ

何レモ内容充實シ有益ナルモノ尠ナカラザリキ。

●第十三同學術集談會演題

一、陰莖（馬）凍傷癰疽癰ニ就テ

獸醫學博士 市川 厚 一（北海道）

二、子宮腔部癌腫發生ニ關スル組織的檢索

橋爪賢次郎（東京）

三、黃體細胞性卵巢肉腫（黃體細胞）ニ就テ

石川正臣（東京）

四、レクリングハウゼン氏病ノ本態ニ就テ

中島靜夫（東京）

五、脊髓軟腦膜ヨリ發生セル纖維腫

横尾秋夫（東京）

六、手術後ニ來レル腦へるにや部ヨリ

發セル血管外被細胞腫ニ就テ

相原博（東京）

七、日本住血吸蟲寄生ニ因スル家兎ノ

腸管上皮細胞ノへてろとびニ就テ（第二報）

維腫ノ移植ニ際シらのりん試食ヲ行ヘル家鶏ニ世代ヲ重テ移植ヲ行ヘルニ腫瘍ハ漸次其形態及生物學的性狀ヲ變ジテ終ニ惡性ナル肉腫ニ變異セルヲ認メ更ニ斯ク變異セル腫瘍ヲ何等ノ前處置ヲ施サル家鶏ニ移植スルニ同ジク肉腫トシテ世代ヲ重ヌルコトヲ得タリ、而シテ各試驗ノ對照家鶏ニ於テハ常ニ纖維腫ニ止マレリ。

此ノ事實ハ腫瘍發生學上全身的要約ガ局所的要約ト相俟ツテ重大ナル意義ヲ有スルモノタルコトヲ立證セルモノニシテ學術上價值アル研究ナリト認ム。

大正十年四月三日

審査委員

醫學博士 山極勝三郎
醫學博士 藤浪鑑
醫學博士 佐々木隆興
醫學博士 土肥慶藏
醫學博士 佐多愛彦

○雜報

醫學博士 田原淳
醫學博士 長與又郎

●資產變更登記申請 大正十年二月十八日東京

區裁判所ニ於テ本會資產總額三萬五千七百五拾貳圓貳拾貳錢ヲ參萬七千四百參拾圓九拾七錢ニ變更登記ヲ了ス

●理事變更登記申請 大正十年四月十五日東京

區裁判所ニ於テ左記ノ通り理事變更登記ヲ了ス

左記理事大正十年四月七日任期滿了ニ因リ退任ス

東京市本郷區西片町九番地

文學博士 富士川游
醫學博士

左記理事滿了ノ處定款第十九條第三項ニ依リ副總裁ヨリ囑託セラレ大正十年四月七日重任ス

東京市趙町區內幸町一丁目三番地

醫學博士 長與又郎

一九、鶏肉腫ノ腦内移植ニ就テ

新井 寛 治(仙臺)

二〇、鶏肉腫ノ含有スル一二ノ酵素

醫學博士 木村 清 壽(仙臺)

二一、可移植性鶏腫瘍ニ關スル研究

大島 福 造(名古屋)

二二、大鼠ノ人工の移植其後ノ經過

ニ就テ 醫學博士 梅 原 信 正(京都)

二三、肉腫化學の療法實驗の研究(第一報告)

醫學博士 緒方 知三郎
醫學博士 石橋 松藏(東京)
理學博士 柴田 雄次

二四、可移植性鼠肉腫狀新生物ニ就テ

實驗的研究 小喜多晴雄(京都)

二五、肉腫鼠ノ脾臟ニ就テ

藤 繩 喜代藏(神戶)

二六、鼠肉腫ノ移植増殖ニ及ボス地理

の影響ニ就テノ實驗的研究

小喜多晴雄
藤繩喜代藏(京都)

二七、南滿洲(主トシテ關東州内)在住日

支人ノ癌腫發生ニ關スル統計的觀察

醫學博士 山 本 耕 橘(南滿洲)

二八、惡性腫瘍ノ地理的研究(鈴木信

義氏ノ近江國ニ於ケル調査ニ據ル)

醫學博士 藤 浪 鑑(京都)

●大正九年度懸賞論文審査要旨

査要旨

赤 松 信 磨 君

本會第十二回學術集談會ニ於テ『らのりん試食ガ可移植性家鶏纖維腫ノ發育ニ及ボス影響』ノ題下ニ發表セル赤松信磨君ノ研究業績ハ著者ガ從來行ヘル諸種脂肪質試食ニ依ル家鶏ノ新陳代謝試驗ノ繼續ニシテ本論文ニ於テ著者ハ可移植性家鶏纖

東京市芝區柴井町三番地

細野順

東京市神田區駿河臺北甲賀町十一番地

醫學博士 佐々木隆興

左記ノ者ハ定款第十九條第三項ニ依リ副總裁ヨリ囑託セラレ大正十年四月七日理事ニ就任ス

東京市本郷區弓町二丁目三十四番地

醫學博士 稻田龍吉

東京市淺草區左衛門町一番地

醫學博士 鹽田廣重

●篤志家ノ寄附 牛込區餘丁町三十五番地田村

寛貞氏ハ本會ノ趣旨ヲ贊助セラレ故めれ子慈善基金中ヨリ第二回寄附金トシテ金五拾圓ヲ大正十年三月七日寄附セラル。

●會員異動

入會

東京市本郷區駒込動坂町一八 古畑種基氏

慶應義塾大學醫學部病院細菌學教室

一四四

白井珍三郎氏

川上漸氏

中村柘氏

八田善之進氏

東京病院研究室

武藤昌知氏

藏光長次郎氏

轉居

日本橋區兜町四

西山信光氏

